2022(令和4)年7月発行

都歴研

友の会だより 16号

最終号

都歴研友の会事務局　〒191-0033　東京都日野市百草９７１－１５８　増田方
電話・ＦＡＸ　042-591-1853　ホームページ http://rekishitomonokai.sakura.ne.jp

2022年 7月22日

『会』を閉じる

― 東京都歴史教育研究会友の会（退職者の会）解散にあたって ―

東京都歴史教育研究会友の会
世 話 人 会

［1］

東京都歴史教育研究会友の会（退職者の会）は、2020年6月開催の第14回総会をもって幕を閉じるはずであった。歴史的には繰り返し人類を襲う疫病の一つにすぎないとはいえ、2020年1月からの地球規模で蔓延した新型コロナウイルス・ＣＯＶＩＤ－１９とその変異株Ｔ４７８Ｋ、Ｎ５０１Ｙ、Ｅ４８４Ｋ、Ｅ４８４Ｑ、Ｌ４５２Ｒ、Ｈ４９０Ｓなど，通称α株、β株、γ株、δ株、η株、κ株、λ株、ο株などの為、2020年、2021年と総会を開催することが出来ず今日を迎えることとなった。

友の会発足

［2］　本会は2007年6月9日、東京都歴史教育研究会事務局の負担軽減、都歴研への財政的援助、在職中都歴研でお世話になった退職者の方々との親睦を図ること、の三点を目的として発足した。都歴研の中でこの種の会の必要性が論じられはじめて7年、2006年10月16日以降8ヶ月強の準備期間ののちのことである。

「友の会」は発足以来、東京都歴史教育研究会総会の行われる会場校の一室をお借りして年1回の総会と近隣居酒屋での懇親会を開催。そして、会員宛てに都歴研が開催する年2回の講演会と年3回の史跡見学会などへのお誘い、年1回開催される全国歴史教育研究協議会研究大会並びに関東歴史教育研究協議会大会等のご案内を送付した。

また、「友の会」独自の活動として、年1回の「友の会だより」発行、年1回の泊を伴う海外あ

最終号の内容

解散にあたって　（友の会世話人会）　1
友の会会員一覧　6

私にとっての都歴研友の会　（多田統一）　6
思い出すことなど　（増田克彦）　7
私の世界史プリント作成法　（松家直子）　10
「竹橋事件」を知っていますか　（矢島恒之）　14
やじ馬四代―我が家系と近代史　（小澤拓美）　17
私にとっての缶詰　（多田統一）　24
訃報　滝沢順先生　24
映画から見る近・現代の歴史　（村木逸子）　25
「鎌倉 New Wave を訪ねて」　（小澤拓美）　31
会員の著書　『博愛堂史話』　（重政文三郎）　34

「友の会だより」総目次　35
これからの友の会 34 ／ホームページご案内　36

海外研修アルバム

⇖ ヴェネチア
⇗ ナポリ
⇘ バルセロナ
⇙ プラハ

るいは国内旅行の実施、その他学習会やミニ歴史散策の開催等、年 4 回ないし 5 回の世話人会会合を軸として多彩な活動を続け、その活動の概要は毎年 6 月に発行される「都歴研紀要」の紙面をお借りしてご報告してきた。

友の会の活動

［3］　「友の会」の年会費は 2,000 円だったが、少なくない会員からの会費前納や寄付のおかげで常に潤沢であった。年平均大凡 13 万円の収入に対し、支出は、都歴研への援助金、会報印刷費、通信・輸送費、事務費、会議費、研修旅行補助費、ホームページ作成・維持費といったもので、年平均 11 万円弱に収まるという状況で終始した。そのことから、解散決定以降、2019 年度は会費をいただかず、19 年度以降の会費前納分はお返しした。

研修旅行

［4］　「友の会」独自の活動としての年 1 回の泊を伴う旅行は、事前学習会と事後の「同窓会」を伴いつつ、2008 年度、11 月 4 日から 12 日までの 9 日間にわたったローマ・ピサ・フィレンツェ・ヴェネティア等の「イタリア研修」旅行（参加者数 25）を皮切りに、09 年度、10 月 18 日・19 日の「白石／米沢の旅」（参加者数 15）、10 年度、12 月 3 日から 10 日、8 日間のナポリ・ポンペイ

遺跡・アマルフィー・マテーラ・アルベロベッロ・シチリア島等の「南イタリア／シチリア旅行」（参加者数 19）、11 年度、10 月 23 日から 25 日、2 泊 3 日の「平泉と奥六郡の旅」（参加者数 11）、12 年度、10 月 30 日から 11 月 6 日のオーストリア・チェコ・スロバキア・ハンガリーの「中央ヨーロッパの旅」（参加者数 20）、13 年度、10 月 28 日から 2 泊 3 日の「日光―紅葉に燃える修験の道を訪ねて―」（参加者数 15）、14 年度、12 月 1 日から 8 日、9 日間のスペイン「歴史のミルフィーユを訪ねて」（参加者数 17）、15 年度、11 月 16 日から 18 日、2 泊 3 日の京都・湖北「台密と東密の歴史、湖北の風土と惣村」（参加者数 15）と、海外と国内とを交互に実施してきた。

海外旅行は我々の企画を旅行業者に持ち込んで実施していたが、費用が嵩むため、12 年度は業者企画に便乗した。しかし業者企画に便乗するのは、当然のことながら一般の応募参加者と同行することとなり、その旅は我々の思いとは異なるものにならざるを得ないものにもなった。尤も、業者企画に便乗することで後々までその際の一般応募参加者との間の交流を生むという副産物もあった。

しかしながら世話人の高齢化によるエネルギーの枯渇などからその企画・実施が次第に困難となり、15 年度を最後に泊を伴う旅行は中止、16 年度は 11 月 15 日「源頼朝時代の鎌倉を求めて」（参加者数 22）、17 年度、11 月 19 日、さきたま古墳群・行田「『さきたま』古代から近代を巡る」（参加者数 26）、18 年度、10 月 27 日「香取・佐原への旅」（参加者数 15）、19 年度、10 月 31 日「『富士の恵み』を訪ねて」（参加者数 20）、20 年度に予定されたもののＣＯＶＩＤ－１９のために延期されていた 2022 年 5 月 18 日の「鎌倉ＮｅｗＷａｖｅを訪ねて」（参加者数 17）と基本的に日帰りの旅行となった。

なお、世話人会が会計監査を口実とした泊を伴う旅行を 2008 年 3 月 8 日・9 日に伊豆大島での「大島遊覧」、また 2010 年 4 月 12 日・13 日に奈良で実施したことを付記しておく。

［5］　友の会の旅行参加者にはＡ４判１枚ないし 2 枚の記録写真集がその都度届けられたが、海外旅行の場合には記録写真のみならず記録・感想も載る冊子が作られた。2011 年 1 月 20 日にはＡ４判 21 頁の『南イタリア／シチリアの旅アルバム』が、2013 年 2 月 16 日にはＡ４判 32 頁の『中欧の旅アルバム』、2015 年 2 月 16 日にはＡ４判 22 頁の『スペインの旅アルバム』が参加者に届けられている。

歴史散歩と学習会

［6］　泊を伴う旅行を中止したこととともかかわり、新たに企画した、17 年度、7 月 17 日の歴史散歩「王子駅周辺」（参加者数 7）、18 年度、9 月 5 日の「たばこと塩の博物館」見学（参加者数 8）、19 年度、7 月 7 日の歴史散歩「文京の地―文学・歴史そして先端技術」（参加者数 4）が実施された。

また、17 年度、9 月 19 日に開かれた近世文書講読会「『大山参り旅日記』を読む」（参加者数 12）、18 年度、4 月 16 日の学習会「全国の国分寺跡を巡る」とこれにセットされた史跡見学会「武蔵国分寺跡とその周辺を巡る」（参加者数 27）等、一連のミニ歴史散歩や学習会も好評裡に行われた。

都歴研行事

［7］　都歴研が開催する年 2 回の講演会と年 3 回の史跡見学会、全歴研大会や関歴研大会等にはそれぞれ十数名から数名の会員が参加した。友の会発足当初は相応の数の友の会会員の参加で都歴研行事に貢献することができたが、ここ数年、会員の高齢化に依るのだろうか、会員の参加者は少なく、その都度都歴研事務局からご連絡頂いくことに対し申し訳ない思いもしてきた

友の会だより

［8］　平均して 20 頁を超えるＢ５判の会報「友の会だより」が年一回 350 部程発行され、会員と全ての都立学校と一部の国・私立高校の歴史担当教員に送付された。但し、2020 年の 14 号並びに 2021 年の 15 号は、コロナ禍の中、印刷から発送

までの作業を世話人が一堂に会して行う事が困難になった為、発行部数を 14 号は 100 部、15 号は 80 部に減じざるを得なくなり、現職の先生方にお送りできる部数は限られたものになった。

会報「友の会だより」は今号、16 号・友の会解散記念号が最終号となる。創刊号から合わせると総頁数 330 頁、執筆者は延べにして 125 名実質 31 名、その中には 70 歳の峠を越えることなく鬼籍に入られた樋口秀司氏、礒山　進氏、池口康夫氏の名も見える。88 歳で亡くなられた滝沢　順氏の絶筆、15 号掲載の「古い地図で旅する」も貴重である。

記事は会員の筆になる「友の会」独自の内外における史跡見学会やミニ散策、学習会、都歴研主催の史跡見学会、講演会、全歴研大会などの報告、また個々の会員による紀行文や史料紹介など、実に多彩であった。

14 号では会員からのお便りをもって特集「コロナ禍の中で」を組んだ。会員の著書紹介欄では計 11 名の著書延べ 19 点・23 冊が紹介されている。なお、創刊号から今号、16 号までの合本は、国立国会図書館と都立中央図書館、並びに都歴研事務局に献本される。

［９］　2009 年 7 月全歴研がホームページを再開、2011 年 10 月には都歴研がホームページを開設した。本会も 2013 年 4 月に開設し、「友の会だより」を毎号掲載することによって広く本会の活動を知っていただく努力を重ねてきた。会員と都立学校等の歴史担当教員に送付される「友の会だより」は紙質・経費の関係でモノクロである。ホームページではカラーが可能となり、「友の会だより」が一層魅力溢れるものになったと自画自賛している。今後このホームページをどうするか、検討中である。

都歴研支援

［１０］　都歴研に対する財政的援助としては、07 年度から 13 年度までの 7 年間、都歴研に対し毎年 50,000 円、計 350,000 円を贈呈した。これは東京都教育委員会が強力に推し進めている「高校改革」の一環として行われた教科等教育研究会の自主的自律的研修活動を事実上否定する施策の中、研究会へのいわゆる「補助金」を停止したことに対するものであった。その後、厳しい管理統制のもとではあるものの 12 年度に都教委からの「補助金」が復活したことを受け、14 年度以降はこれを全歴研大会での分科会発表者に「歴史教育研究助成金」として 1 人あたり額面 5,000 円の図書カードを贈呈することとし、15 年度 12 名、16 年度 2 名、17 年度 10 名、19 年度 10 名の計 34 名、170,000 円を贈呈した。

［１１］　少なくない人数の顧問への連絡等、都歴研事務局の負担軽減についてはほぼ完璧に行われてきたとの思いがあったものの、都歴研の事務局体制が必ずしも確立しているとは言い難い時期もあり、東京の教育行政事情を鑑みれば、ただでさえ精神的にも肉体的にも多忙な会長・事務局長などの方々に「友の会」に対する諸連絡・情報提供等で心ならずもいらぬ負担をおかけしていた実態があった。

東京都歴史教育研究会の規約第 12 条には「本会に顧問を置くことができる。顧問は会長が委嘱し、会長の諮問に応じる。」との規定がある。顧問には会長・副会長経験者が就くのが通例である。都歴研発足以来、都歴研事務局は顧問に対し、都歴研や全歴研の行事案内をそれぞれにその都度行ってきたが、顧問の数を減じる措置を行う努力をしてきた経緯も無いでもないが、結果、顧問の人数が少なくないこともあってその手間や費用も嵩み、また顧問の中には「会長の諮問に応じ」を超えて発言するものも少なからずいらした。

これらの解決を図るためとしたのが都歴研事務局の負担軽減策であった。顧問等への諸連絡の手間や費用は「友の会世話人会」が全て引き受け、友の会会則第２条には「本会は会員相互の親睦を図り、東京都歴史教育研究会の発展に寄与することを目的とする。ただし、東京都歴史教育研究会の方針ならびにその運営に関与しない。」との規定を入れた。しかし、友の会世話人会からの顧問を含む会員への諸連絡には都歴研の会長や事務局と

の連絡を密にせざるを得ず、それが都歴研の会長や事務局にいらぬ負担をお掛けすることになった。

解散に至る経緯

［１２］　発足時44名の「友の会」会員数は、100名の会員をめざしたものの、ピーク時、2013年度の62名以降、新しく入会される方よりもお亡くなりになる方や体調を崩されるなどから退会される方の方が多く、現在48名。新会員の獲得と世話人の若返りの努力を一貫して続けてきたものの、思うに任せず現在に至っている。なお、これまでにご入会頂いた方は計73名、うち14名の方が鬼籍に入られた。改めて衷心より哀悼の意を表する次第である。

［１３］　会員数低迷の理由は、おおよそ次のようなことであろうか。

21世紀に入り、60歳での定年退職後、年金受給年齢との関係から 65 歳までは退職者のほゞ全員がフルタイムで働かざるを得なくなり、定年退職年齢は事実上65歳となった。以来、賃金はこれまでの嘱託・再任用以上に低く抑えられるようだが、年金が減額されつつあることや物価上昇・増税の気配あるいは寿命の延伸等からくる老後の不安、それ以上でもあろうか生きがいを求めて 70 歳までパートタイム、あるいはフルタイムで働く方が激増した。

高年齢者雇用安定法の改正によって、2021年4月1日よりこれまでの65歳までの使用者の雇用確保義務と70歳までの就業確保努力義務が、定年の70 歳までの引き上げあるいは定年制の廃止、70歳までの継続雇用（再雇用・勤務延長）制度の導入等の措置を講じるよう努めるということになった。今や年金支給開始年齢は70歳、あるいは73歳との声も聞く。今後は75歳まで働く方が増えるだろう。付言すれば、年金の繰り下げ支給年齢も75歳になった。

教員の員数不足もあって再任用の年齢制限も撤廃された。加えて、それぞれの職場における退職者の位置あるいは役割は、「友の会」発足当時の21 世紀初頭の嘱託員やその後の再任用教員のような補助的なものから相応に重要なものとなっており、「友の会」活動の如き「老後」の「余暇」、「遊び」にエネルギーを割くことが困難になっているとも思われる。

健康寿命・平均寿命は確実に伸びている。一方、60歳の峠、70歳の峠を越えることなく鬼籍に入られる方や施設に入らざるを得ない方の少なくないことを考えるとまた別の思いも湧く。そして 80歳の峠である。これから先、日本人はいつ、「老後」の「余暇」を「存分に」「楽しむ」ことが出来るのだろうか。

勿論のこと、これとはまた別に、現役時代、都歴研活動に必ずしも積極的とは言い難い方もいらしたが、それと同様、退職後、これまでとは異なる新たな趣味・趣向・生きがいを見出し、それに邁進される方が増えているに違いない。時代と共に、個人で、あるいは小さな輪、極く親しい者に限られた中での活動を好む者が増えてきていることもまた確かである。

国や都の教育行政のありようも含め、凄まじい勢いで変更され続けている歴史教育、そして現職の諸活動に対する退職者の興味関心が希薄になりつつある状況もあるだろうか。

［１４］　創設以来15年、結果として、高齢化著しい世話人会の現状と先々の新陳代謝の困難なことを考えると、これまでのような「友の会」の活動を継続することは難しく、将来の復活を念じつつ一旦解散するとした方が禍根を残さずに済むのではないかと考えたのが今日の結果である。

都歴研の中で「退職者の会」の必要性が語られ始めて四半世紀、時の流れを改めて感じさせられる。いずれの頃か、このような「会」があったらしいと語られるかもしれない、と思うのもまた楽しい。ここ十数年来、特に、このコロナ禍の中にあって、老人会、各種同窓会・同期会を初めとする年長者の組織が次々と解散せざるを得ない状況に追い込まれている。やむを得ないこととは思うものの、感慨深いものがある。

［１５］　当「友の会だより」16号は以上縷々

述べてきた事情のいわば結論としての記念号と言える。「友の会」会員、「友の会」を支えてくださった多くの先輩諸氏、都歴研に結集されている東京都内の国・公・私立学校に勤務する歴史担当教員の方々、ご厚誼頂いた方々には長期に亘りご指導ご鞭撻いただいた。厚く御礼申し上げたい。

［１６］　「友の会」は、解散後も現世話人会メンバーを中心に年一・二回の情報交換会や研修旅行を通じて親睦を図る都歴研とは直接的かかわりを持たない純粋な都歴研退職者の親睦団体となる予定である。既に、世話人会では東京書籍教科書博物館見学、千住界隈歴史散策、日野市高幡・百草周辺歴史散策、あるいは、桐生、古河、笠間への一泊旅行等が話題となっている。(P34 参照)

友の会会員一覧　２００７年～２０２１年

浅川　浩二
安蔵　復也
飯田　國雄
池口　康夫
礒山　　進
市川冨美子
鮒澤　俊雄
鮒澤　瑛子
小笠原千草
岡野　敬生
奥　　保喜
奥山　英男
小澤　拓美
鍵山　充尚
柏原　　哲
糟谷　邦雄
加藤　直道
亀岡　良平
蒲生眞沙雄
萱原　昌二
河上　一雄
神山　義三
木村　清治
日下部公昭
黒石　昌秀
黒田比佐雄
小林　良子
駒井　　眞
小宮　　進
斎藤源三郎
斎藤　光司
櫻井　道子
佐々木虔一
佐野　和子
佐藤　　徹
佐藤　道男
三條　和男
重政文三郎
高原　　將
滝沢　　順
高田　岩男
竹内　秀一
竹浪　隆良
多田　統一
田中晋一郎
田中　暁龍
千田　捷熙
千谷　啓雄
角田　　實
豊田　岩男
中島　規男
中村　道雄
蜷川　寿恵
長谷川　賢
兵頭　信彦
浜中　賢次
樋口　秀司
原口　幸男
藤澤美恵子
増田　克彦
松家　直子
松尾美栄子
真中　幹夫
宮崎　正勝
村岡　　薫
村上　雅盈
村木　逸子
村田　菊子
村瀬ヒデ子
森　　嶺夫
矢島　恒之
矢田貝美智子
吉田登代子

創立時に
ご寄附頂いた方

田中　寿美
西　　秀夫

（敬称略）

私にとっての都歴研友の会

多田統一

１　入会の経緯

退職後まもなく、都歴研総会に出席した折、友の会の集まりに出ることにしてみた。そこで、久しぶりに小沢拓美先生に会い、世話人になるよう勧められたのである。最初、友の会に対して管理職のイメージがあったので躊躇したが、矢島恒之先生もいたことで素直に受け入れることとなった。小沢先生も矢島先生も、都の研究員としていっしょに取り組んだ仲間である。二人とも、私から見れば大先輩であるが、それに甘えて１年間実に楽しい経験をさせてもらった。思い出深いのは、夏の御嶽神社での宿泊研修である。テーマは、環境問題。私は、住民運動など社会的な視点から取り組んだ。ぐいぐいとみんなを引っ張る小沢先生、温厚な矢島先生と、様々なタ

イプの人と議論できたことはとても良かったと思う。世話人代表の増田克彦先生は、私が都定通研社会部の副部長をしていた時に、三條和夫先生の後任に部長として迎えた先生である。村木逸子先生にも、都の研究委員会でお世話になった。委員長の村木先生を中心に、環境問題に取り組んだ。砂漠化や熱帯林の破壊、オゾンホールの問題などを、グローバルな視点から追求した。

2　世話人として

①　会計監査

入会当初、世話人会に２～３度出席したものの、その後何のお手伝いもすることなく時が経過してしまった。作業的な仕事も含めて、会の運営を献身的に支えてこられた先生方には申し訳ないことである。それでも、会計監査の担当として総会には出席した。総会前には、会計担当の矢島先生と南千住のコーヒーショップで打ち合わせをした。南千住を選んだのは、矢島先生の自宅に近いことと、私が浅草高校で非常勤教員をしていた関係からである。

②　ミニ研修

友の会行事として、ミニ研修がある。王子、たばこと塩の博物館、千駄木・根津と３回程、その企画と当日の案内を担当した。その記録を会報

に掲載することができたが、編集の重政文三郎先生にはたいへんお世話になった。研修終了後、参加された先生方との反省会があり、いろいろと話をしたことを思い出す。(**写真**は、ミニ研修「王子」)

3　私にとって友の会とは

私は、地理の教員として入都した。地理の教員が何故都歴研なのか、不思議に思う人もいるであろう。これには、私が定時制の教員としてやってきたことと関係が深い。定時制に勤めていたことで、すべての科目を担当することになったのである。葛西南高校では、カリキュラムに地理がなく、歴史の教員としてその役割を果たした。豊田岩男先生が校長だった時期である。地理には、友の会のような組織はない。退職後の活動は、歴史教員の層の厚さを物語っていると言えよう。増田先生のような積極的な海外渡航、小沢先生のようなランニングへの挑戦、まだまだ先輩の先生方の姿を見習わなければならないと思われる。

思い出すことなど

増田克彦

その1　教壇に立った22年

いつのまにか、東京都歴史教育研究会　あるいは全国歴史教育研究協議会、いくつもの歴史学・歴史教育関係団体とのかかわりも、半世紀を超えてしまった。

半世紀の間には実に多くの恩師・先輩・同輩・後輩の方々が鬼籍に入られた。筆者も間もなく傘寿を迎える。101 歳で亡くなった父が 90 歳を超えた頃、友達がみんないなくなったと呟いた事がある。曰く言い難い思いのつのる今日此頃である。

教壇に立っていたと言いうるのは 22 年間。東洋史を専攻した者にとって世界史以外を担当せずに済んだのは何とも言えず幸せな教員人生だったと思う。ただし、ただの一度として今日の授業はうまくいったと思えたことがない。誰しもがそんなものなのだろうとは思うものの、今もって忸怩たるものがある。

22 年間、ほぼ一貫してやってきたことが四つある。

一つは、毎週、歴史地図の塗り絵を中心とする

B4 一枚のプリントを宿題として出したことである。チェックをし、花丸を付け、ありがとうと朱書して返した。このスタイルの宿題プリントは、亀岡良平先生の真似である。山川出版社『歴史と地理』309（1981／5）の「私の実践報告・Ⅰ　モンゴル帝国」でも紹介させていただいた。どうでも良い事だが、30 歳代後半、毎年のバレンタインデーには担当していたクラスの女子生徒ほぼ全員からチョコレートが届いた。次の時間には「ホワイトデーには早いけれど」といってこの宿題プリントを配布し、男子生徒からは「俺たちはあげていないのに」とぶつぶつ言われたものだ。課題としては夏季休業中の「歴史新聞」作成や博物館等の見学もある。無理強いしすぎたかとも思う。

二つには、授業の感想を書いてもらい、それをまとめて週刊で「世界史通信」と題し配布したことである。これは担任をした際、週 2 回刊ないし隔日刊の「学級通信」を発行していたものの変形である。感想はいろいろだったが取捨選択することなく全て載せた。毎時間配布した数枚から十数枚の資料プリントと共に、いまだにこれを保管しているという卒業生がいた。まさに涙である。

三つは、可能な限りその時代と地域の音楽をテープで流したことである。高校・大学の先輩であり恩師でもある飯村進先生が、授業中、チャイコフスキーの「１８１２年」のお話をされたこと、初めての職場で机を隣していた地理の森田恒芳氏から九州の地理の方がスメタナの「わが祖国」を流しながら球磨川の授業をなさっているとの話を聞き、それに触発されたことからである。これも山川出版社『歴史と地理』351（1984／11）の「世界史の広場」に「視聴覚教材雑感」として紹介させていただいた。古代エジプトから現代の音楽まで、使えそうなレコード類を買い集めコピーした。「ナポレオン」や「帝国主義の時代」の音楽は我ながら圧巻だったと思っている。教育実習をすることになったという卒業生が、まだあったら貸してくれないかと言ってきたこともあった。いまだに残念に思っているのは、アッシリアの復元音楽の録音に失敗し流せなかったことだ。

そして四つ目が、年度最後のテストで「高等学校に於ける世界史学習を終えるに当たっての感想を、自らの将来への希望・展望とのかかわりあいの中で述べよ」という題でB4 一枚の記述を求めたことである。筆者が教職に就く前から流行っていた「１０年後の私」を書け、あれの変形である。100 点満点のうちの 10 点問題としたから全員が書いてくれた。答案は 10 年から 15 年後にお返しするとして約束通り返却した。結婚式に呼ばれた際には嫌味だったが祝辞の中で読み上げたりもした。住所不明で返却できないものが 1・2 割は必ず出た。時にクラス会で話題となり、もしまだ保管してあるようだったら送ってくれないかとの連絡があって、思わぬ出会いになることもある。過日、弘田隆彦氏からその話を聞いたとして角田展子氏が自分もそうしているとのお話を聞いた。ありがたい事である。

思い出としながら、どうということはない、結局は誰もが嫌がる自慢話、申し訳なくお恥ずかしい次第。

と言いつつ、自慢ついでにもう一つ、申し訳ない。

始業式と終業式・修了式の壇上からの話は筆者にとっては３分程での歴史の授業、そのほゞぼゞの原稿は拙著『造花の菊』（2005/4、源流社）の「ただお」の項に１つ。現役最後の修了式では、1950 年、東京大学音感合唱研究会トニカ合唱団に入っていた日本女子大学のすずきみちこが合唱団の仲間たちと作詞作曲した、「いぬふぐり」を歌っただけだったから、3 分とはかからなかったろう。年配の教員がすっと寄ってきて「先生、あの歌は」と言ってくれたのも嬉しい事だった。

（2020. 3. 16 記）

追記　文中、お名前を出させていただいた飯村進先生は 2000 年 9 月 11 日に 79 歳で、亀岡良平先生は 21 年 10 月 8 日、83 歳で、森田恒芳氏は 05 年 1 月 15 日、64 歳で亡くなった。恩師・先輩・同輩・後輩・教え子、友人知人が次々と鬼籍に入って行く。やむを得ないこととはいえ、寂しい限りである。

その2

嗚呼 新宿高校定時制

1988.4～1991.3
新宿高校定勤務

『そぞろ寒き日々に・・夜間定時制高校での曰く言難き 1095 日』なる冊子を手にしている。A5 判 98 頁、手作り。筆者の新宿高校定時制課程での 3 年間における各種会報に載せた雑文や折々の想いの句、そして記録類をまとめたものである。5 冊ほど作ったと思うが、何人かの方に贈呈し、手元にはこの 1 冊。

高校教員歴 22 年目、初めて定時制に赴任したのは 1988 年の 4 月。定時制の教頭は校長にはなれないと言われていた時代である。都教委は公言してはいなかったが実態としてはその通りだった。

定時制や通信制に関する知識が全くなかったわけではない。各種教育研究会や組合活動を通じて話は聞いていた。赴任することが決まって桑原三二先生が九段高校定時制創立 50 周年記念として 1978 年に書かれた『東京府における公立夜間中学校設置の経緯（東京府公立夜間中学発達史）』をはじめ、何冊かの書籍も入手し一読していたから、多少の知識もあった。しかし驚きの連続だった。定通教頭会「会報」の自己紹介欄に「初の定時制勤務に感動を覚えること多」としたのを見て校長が「感動ねえ」とおっしゃったのを記憶している。

ピーク時には一学年 5 学級計 20 学級もあった新宿高校定時制。昭和 40 年代後半から減りはじめ、赴任した時には一学年 2 学級の計 8 学級になっていた。前任の教頭は、引継ぎの際「何もするな」と言い残した。問題は山積していた。教頭の執務机は大職員室を追い出され、陽の当たらない全日制印刷室の片隅におかれていた。教員が出勤してくる 4 時 30 分頃から 1 限目の授業が落ち着く 6 時過ぎまで、大職員室の休憩コーナーで野球や相撲を見るのが常となった。野球にも相撲にも興味は無かったが、教員には「相撲が好きなんですね」と言われた。

殆どの教員は 9 時過ぎには退勤したが、何人かの熱心な教員は生徒指導・クラブ指導で完全下校の 10 時を越えて勤務していた。筆者が全ての戸締りの確認とモク拾いをし、警備主事に見送られて校門に施錠し駅に向かうのは 11 時過ぎ。酒臭い車輛は嫌だった。ちなみに、拾った吸殻は 3 年間で 10,459 本と記録されている。吸いかけの煙草を教室の掃除用具入れに投げ込んだ者がいて、軽いボヤ騒ぎになった時には、翌日事務長から「だから若い教頭は駄目なんだ」となじられた。

何人かの教員や主事とは今でもご厚誼頂いているが、20 人足らずの教職員には実に様々な方がいた。健康を害されている方も多かった。が、それらをここで触れるのは控えよう。

生徒は可愛いかったが哀しかった。あの子たちは今どうしているのかと時に想う。中途退学者は 50%から 60%にのぼった。積立金等返還不能金の額の大きさにも驚かされた。年長の 37 歳の方からは学ぶものが多かった。生徒たちとの会話の中では全日制にはない、いわば現実といつも向き合わざるを得なかった。原宿警察署の少年係とはツーカーの仲になった。

社会科教員の好意で、四年生の週一回二時間、3・4 時限目の選択世界史を持たせてもらった。毎回、読みきりのテーマ。何枚もの資料プリントと音楽テープを用意した。居眠りは黙認した。

修学旅行には毎年付き合った。この子らが将来行くことはまずないだろうとして教員は北海道など遠方を旅先に選んでいた。入学当初から修学旅行費を積み立てていたものの、参加者は学年の半分にも満たなかった。皆 20 歳を越えていることもあって旅先での生活指導は楽だった。

始業式・終業式には「教頭訓示」というのがあり、入学式・卒業式の式次第には「教頭祝辞」が入っていた。「校長式辞」があるのだから「教頭訓示」「教頭祝辞」は要らないだろうと校長に進言したが、定時制は特別だからと毎年訓辞・祝辞を垂れることになった。

非日常の思い出の一つに、昭和天皇の死去にかかわることがある。葬儀が隣接する新宿御苑で行われることになったことから大凡一ヶ月、夜の警備は厳重を極めた。おかげでこの間校門周辺でたばこを吸う生徒はいなくなった。「中核」や「革マ

ル」のビラが撒かれた。新宿御苑の塀の赤外線設置工事も大変だった。校内では弔旗を出すかどうかで揉めた。深夜校門前に立つ地方から派遣された警官の何人かとは言葉を交わすようにもなった。中には定時制高校出身と言う者もいた。

定通教頭会、定通研、給食研、定通高体連など3 年の間には都や全国の定通関連組織の役職を少なからず経験させていただいた。最も多くの事を学んだのはやはり給食研だろう。高校生の時、部活動の後、頻繁に定時制の食堂のお世話になった経験から、都教委には全日制での食堂設置を何回か提言したが取り上げられた形跡はなかった。遅々として冷房の設置が進まなかったことと同様、「改革」を進める行政にとっては一顧だにする必要のない提言だったのだろう。

3 年の間には定通教頭会の雰囲気も少しずつ変化した。学区教頭会終了後の懇親会、1 年目には全員が揃っていたが、3 年目にもなると校長が帰って来いと言うからとのことで参加しない者が出るようになった。管理強化の風が吹き始めていた。

ストーブのぬくもりの中板書消す
風薫る女生徒(こ)の肩越しの海と街
紅梅や胸の濁りはそのままに
「うるおい」など夢のまた夢そぞろ寒

1924（大正 13）年、関東大震災の翌年、被災した生徒たちの為、当時の府立中学の先生方によって創られた私立東京三中夜学校や四中夜学校、五中夜学校、七中夜学校、上野二中夜学校などと同じ私立東京六中夜学校、後の都立新宿高校定時制は 2010 年廃止された。閉課程式典などは行われたのだろうか。いずれにせよ、旧職員たる筆者には閉課程に係る連絡も通知もなかった。今の教育行政そして都立高校はそんなものなのだろうとは思うものの、不快だった。

私の世界史プリント作成法

松家直子

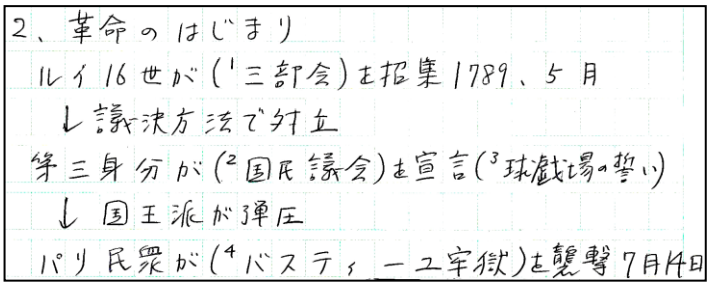
〇はじめに

2014 年３月末に都立小平高校を定年退職し、2019 年３月で非常勤教員を終えた際、世界史の授業で作ってきたプリントを整理しました。もう使うことはないと思っていましたが、同年９月に思いがけなく小平高校で時間講師をつとめることになり、プリント類が役に立ちました。この機会に私のプリント作成法を書いてみようと思います。

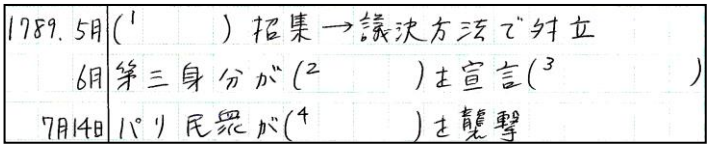
〇年表式プリントを作るまで

長年教科書に沿ったまとめ式のプリントを作ってきましたが（例１）、小平高校の外国語クラスのフランス革命の授業で、たまたま年表風に板書したところ（例２）、わかりやすいという生徒があらわれ、それに力を得て毎年改良し、最終的にこんな形になりました（例３「フランス革命」P12）。

例１


2、革命のはじまり
ルイ16世が（1三部会）を招集1789、5月
↓議決方法で対立
第三身分が（2国民議会）を宣言（3球戯場の誓い）
↓国王派が弾圧
パリ民衆が（4バスティーユ牢獄）を襲撃7月14日

例２


1789. 5月	（1　　）招集→議決方法で対立
6月	第三身分が（2　　）を宣言（3　　）
7月14日	パリ民衆が（4　　）を襲撃

毎回当番を決めてプリントの書き込みをし、質問・感想も書いて提出してもらい、コメントをつけて返します。

〇年表式プリントのいいところ

「世界史はヨコのつながりが大切」と言い続けてきましたが、一枚のプリントの中で、ヨコとタテのつながりを一目で見られるのが最大の利点だと思います。例４の「帝国主義と世界分割」では、イギリスの国内政治をタテの動きでとらえ、イギリスのアフリカ進出をヨコの広がりで追うことができます。風間睦子先生がこのプリントを見て、「空欄を順につなげていくと小論述が書ける」と評価してくださいました。

「イギリスによるアフリカ植民地化」というテーマに対して、

「ディズレーリの（２－１スエズ運河会社の株買収）を契機に、イギリスはエジプト・スーダンに侵入し、（２－２ウラービーの蜂起）・（２－３マフディー派）の抵抗を制圧した。（２－４ジョセフ＝チェンバレン）の縦断政策は、フランスの横断政策と衝突し、（５－２ファショダ事件）をひき起こした。ダイヤモンドと金をねらった（２－５ローズ）の侵攻が、（２－６南アフリカ戦争）に拡大し、イギリスはトランスヴァール・オレンジ両国を併合し、さらに（２－７３Ｃ政策）を展開して（７－５３Ｂ政策）と対立した。」

という具合になります。

〇年表式プリントの不十分なところ

年表が細かくなりすぎて大きな流れがつかみにくいこともあります。

例４のプリントでは、「列強の二極分化」の図（例５）を板書して、「ファショダ事件で仏が撤退したことが英仏協商につながる」「日露戦争で露が敗れたことが英露協商につながる」ことを強調しました。

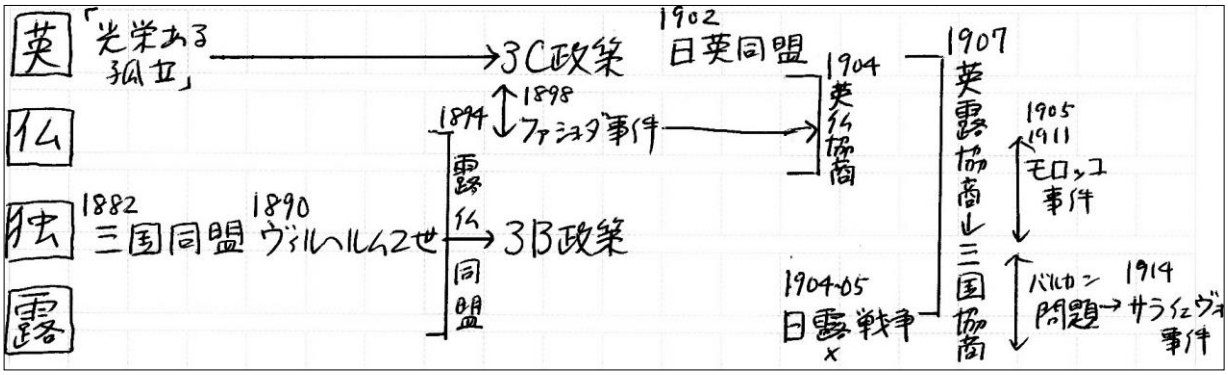
〇生徒の声

国分寺高校に異動してさっそくこの年表式をやってみたところ、生徒たちから「プリントに説明が少なすぎるので、別のノートに用語集の説明を書いている」という声があがりました。「それこそが自分の勉強じゃないの」と内心思いつつ、「教員の役割は教科書等を見てすぐわかることを言うことではなくて、教科書の離れたところに書いてあってなかなか気づかないことを結び付けて示すことなのだ」と防戦に努めました。その後は少し説明を増やしたり、関連するページを示したり、たくさんのメモを取るように促したりしました。

２度目の小平で受け持った３年選択クラスの生徒が、こんな感想を書いてくれてうれしく思いました。

「関連するところを時代を飛んで解説していただけるのはとても助かっています。復習と、理解できているかの確認になって良かったです」

例５　列強の二極分化



例3

3 フランス革命 1789～99

(教)P.248～252 (資)P.196,197,200

日付／　組　番氏名

			フランス	ヨーロッパ各国
絶対王政	三部会		1789 5月 貴族の要求で〔1-2〕招集(ヴェルサイユ)	○議決方法 身分別→個人別
	国民議会	自由主義的貴族と上層市民	6月 第三身分の議員が三部会を離脱して〔1-3〕結成 → 〔1-4〕	
			7月14日 パリ民衆が〔2-1〕	各地で農民蜂起
			8月 自由主義的貴族〔2-2〕による改革	
			4日〔2-3〕	領主裁判権→廃止(農奴身分はなくなる)
			26日〔2-4〕	封建地代→有償廃止
			10月〔2-5〕パリの女性たちが国王一家をパリに移す	
			1790 改革進展(ギルド廃止→営業の自由)	
			1791 4月 ミラボー死去	
			6月〔3-1〕国王一家がオーストリアに逃亡を図る⇒国民の失望	
			9月〔3-2〕制定(立憲王政・財産制限選挙)(男性有産市民のみ)	8月 ピルニッツ宣言(オーストリア皇帝とプロイセンが革命に干渉)
立憲王政	立法議会	ジロンド派	1791 10月〔3-3〕成立→党派が形成される	
			1792 4月 ジロンド派がオーストリアに宣戦(革命戦争開始)	
			8月〔4-1〕パリ民衆と〔4-2〕がテュイルリー宮殿を襲撃→王権停止→男性普通選挙	
共和	国民公会	ジロンド派	1792 9月〔4-3〕〔4-5〕成立→王政廃止と〔4-4〕を宣言	軍歌「ラ＝マルセイエーズ」→国歌になったのは1879年
			義勇軍がオーストリア・プロイセン軍を破る	
			1793 1月 ジャコバン派(山岳派)が〔5-1〕	2月〔5-2〕
			ヴァンデーの王党派の反乱	英 首相ピット 立憲王政維持のため
		ジャコバン派	6月 ジャコバン派の独裁政権成立(ジロンド派を国民公会から追放)〔5-3〕ロベスピエール中心	ゲーテ「この日、ここから新しい世界史が始まる」
			→恐怖政治(反革命派を処刑)	
			1794 7月〔5-4〕ロベスピエールが処刑される	
総裁政府		穏健共和派	1795 1795年憲法(共和政、財産制限選挙)	
			〔6-1〕成立…穏健共和派(旧ジロンド派)	
			シェイエスら5人の総裁	
			1796 〔6-2〕(旧ジャコバン派)逮捕→社会不安	
			〔6-3〕のイタリア遠征→オーストリア軍を破る	
			1798 エジプト遠征→イギリス軍と交戦	
			1799 11月〔6-4〕ナポレオンが総裁政府を打倒	1799 第2回対仏大同盟
			→〔6-5〕成立(3人の統領)	

○アンシャン＝レジーム(旧制度)---〔①〕の絶対王政の弊害

人口の2%〔②〕〔③〕聖職者 貴族 } 国土の40%を所有し、〔⑤〕を持つ

〔④〕平民 — 有産市民〔⑥〕 都市民衆〔⑦〕 農民→困窮

上層市民 中産市民 ⇐ 〔⑧〕アメリカ独立革命 〔⑨〕ルソー モンテスキュー (教)237

シェイエス〔⑪〕

○人権宣言 ---ルソーの〔⑩〕

第2条 自然権〔⑪〕

第3条 国民主権

第17条 所有権の不可侵 (有産市民の主張)

○アメリカ独立宣言では (教)247 ← 自然権〔⑫〕 抵抗権

○立法議会における党派(貴族・聖職者は引退)

(資)200 グージュ「女性の権利宣言」1791.9月

〔⑬〕〔⑭〕〔⑮〕

上層市民 — 〔⑯〕を維持＝保守派→右派

中産市民 — 〔⑰〕と財産制限選挙を主張 ＝改革派→左派

共和政と〔⑱〕を主張 — 身分・財産の制限なし

← 都市民衆と農民が支持

○ジャコバン派独裁政権の政策 1793.6～10月

〔⑲〕〔⑳〕→農民は土地を手に入れる

…共和政、男性普通選挙 → 施行延期

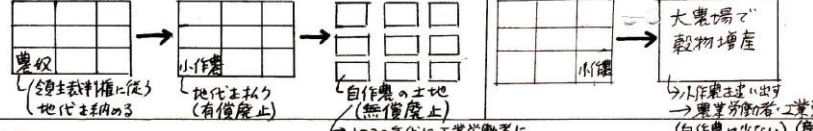
最高価格法

徴兵制、国民教育 国民の権利として

〔㉑〕(共和暦)---グレゴリウス暦を否定(カトリック教会で使われた) → 1806 ナポレオンが廃止

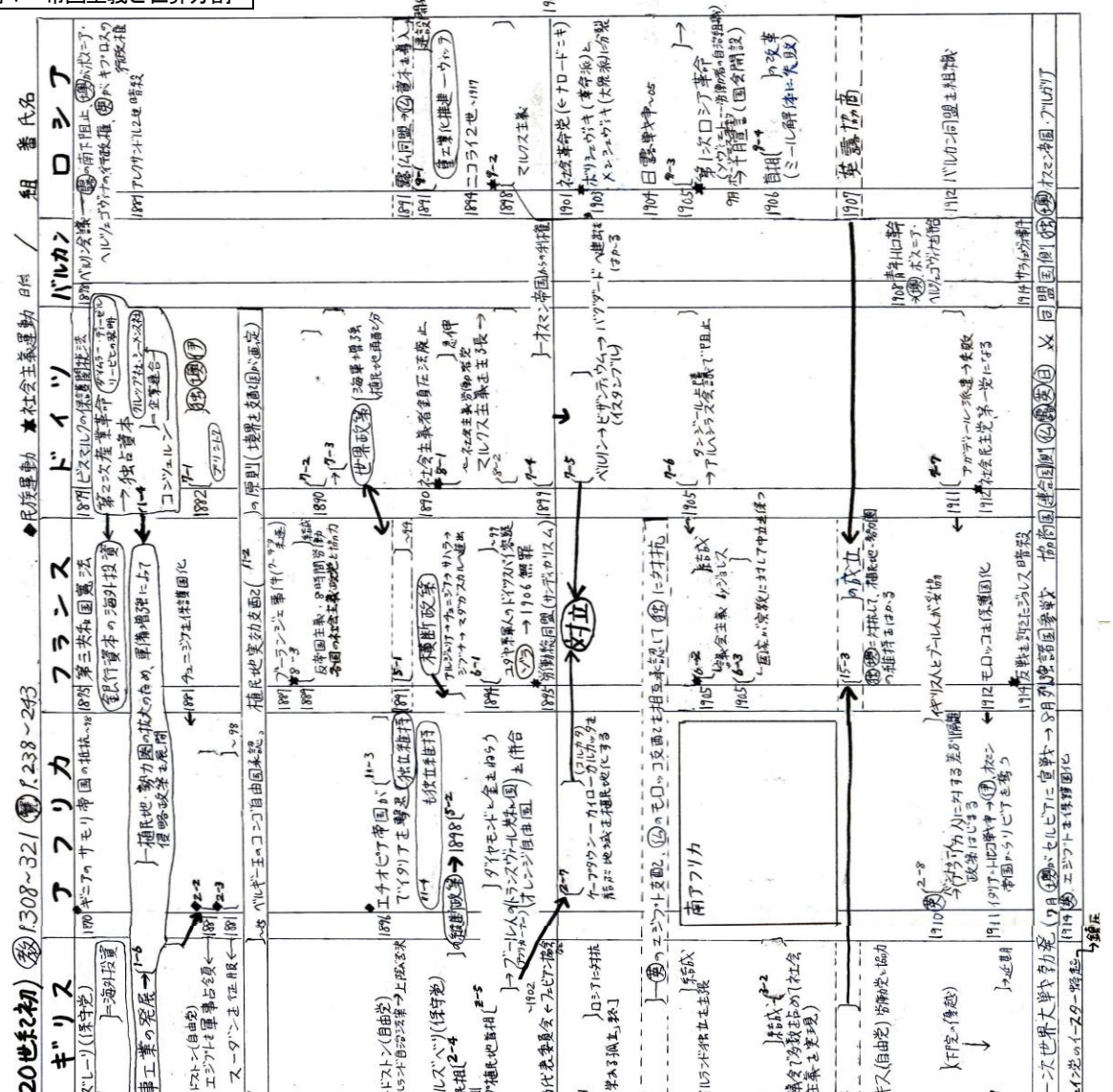
〔㉒〕---地球の周囲の長さの4000万分の1を1メートルとする(1799制定)

<封建的特権の廃止>



<質問・感想>

例４　帝国主義と世界分割



「竹橋事件」を知っていますか

矢　島　恒　之

1878(明治11)年８月23日に起こった「竹橋事件」を知っていますか。

私は、知りませんでした。手元にある『日本史年表』(東京堂出版、2014年増補５版)によれば、西南戦争(1877(明治10)年２月～９月)の翌年、「近衛砲兵隊、論功行賞および減俸を不満として反乱」とあります。

私は、退職後に学生時代からの友人たちとの飲み会で、偶然出てきた話題のなかで、初めて「竹橋事件」のことを知りました。実はこのとき一番驚いたのは、これを話題にしたのが、歴史とは無縁と思っていた英文科出身で、ミッション系女子校で英語の教師をしていた友人だったからです。彼は近くに住む知人からこの事件について知らされ、「竹橋事件の会」もあって研究活動なども行っていると知って、この会に参加しているとのことでした。

＊＊

この事件で処刑された人びとは、1889(明治22)年、明治憲法発布にともなう大赦を受けて陸軍埋葬地の一角に埋葬されました。その後改葬され、現在は青山霊園２種イ11号29側１番にあります。この「旧近衛鎮台砲兵之墓」の顕彰碑には、次のように記されています。

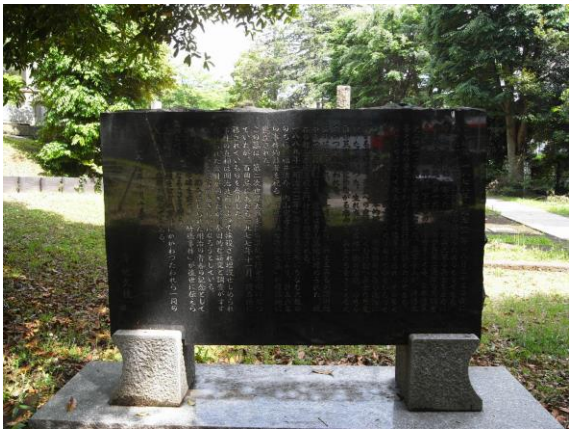
「旧近衛鎮台砲兵之墓」と顕彰碑

「この碑は、一八七八年(明治十一年)八月二十三日夜に起きた「竹橋事件」殉難者の鎮魂のためのものである。

事件は、東京竹橋にあった近衛砲兵大隊の兵士を主力に、東京鎮台予備砲兵第一大隊、近衛歩兵第二連隊の同調者をまじえて、将校、下士官の連座者をふくみ、日本陸軍史上唯一の兵士の叛乱となった三百余人が、待遇改善その他の要求をかかげて直接行動に訴えたのである。

兵士たちはすべて徴兵によって陸軍にとられ、その多くは、前年の西南戦争の戦火をくぐりぬけて命をひろっている。徴兵制度への根本的疑問、明治維新以後の政治に対する不満が、天皇への直訴をふくむ行動へ兵士たちを駆りたてていった。生まれ在所の百姓一揆の伝統、のちの自由民権運動につながる指向も、兵士たちをささえる火であったと思われる。

叛乱は鎮圧され、同年十月十五日、兵士五三名が深川越中島で銃殺刑になり、遺体は青山墓地に



写真㊤「旧近衛鎮台砲兵之墓」(青山霊園にて)
㊦ 顕彰碑　(HPより)

埋められた。現在の都立赤坂高校正門付近と推定される。

一八八九年(明治二二年)、帝国憲法発布にちなむ大赦ののちに、福井清介、内山定吾らの発起により、計五六名の事件殉難者を祀る「旧近衛鎮台砲兵之墓」が埋葬地に建立された。

この墓は、第二次世界大戦末期の混乱で行方不明になっていたが、百回忌にあたる一九七七年十一月、現在地に移されているのを発見した。

事件の真相は明治政府によって抹殺され埋没せしめられ、忘れられた歳月が過ぎたが、全国的な研究と調査がすすみ、ようやく全容があきらかになろうとしている。

たたかい、かつ踏みにじられた明治の青春の記念として、いまここにこの碑を建て、「竹橋事件」が後世に伝えられるべき火となることを願う。

この碑は、遺族をはじめ事件にかかわったわれら一同の反戦平和への悲願の証でもある。

一九七八年十月十五日

澤地久枝撰」

事件の発端となった近衛砲兵大隊の将校ら（HP より）

近衛兵の政治意識

この事件について考えることはいろいろありますが、その一つに処刑された人数の多さと短時間での一方的裁判があげられています。前年の西南戦争では、戦後に反乱参加者として処刑(斬首刑)されたのは22名です。この「竹橋事件」の処刑者の合計は55名で、こちらの方がはるかに多いのです。近衛兵たちの反乱そのものは、事前に政府側に計画が漏れてしまったため、大規模な事件にならずに鎮圧されました。しかし、近衛兵たちの反乱に、明治政府は「西南戦争」以上の危機感を持ったのです。

それには明治維新前後の政治や、徴兵忌避との関係を見ていく必要があります。当初、徴兵は「血税」として国民の多くから忌避されていました。この当時の徴兵制は「免役制」があったので、民衆はさまざまな工夫をして徴兵から逃れました。そのため、鎮台の定員充足は容易ではなかったのです。御親兵以来の士族志願者も比率は低下したといってもまだ残っていました。前年の「西南戦争」では、正規の鎮台兵に加えて近衛兵のほか、屯田兵、警視隊、追加募集の兵が士族出身兵として加わり、全てあわせると、士族が官軍将兵の半数を占めていきました。

この「西南戦争」では、従軍した鎮台兵から多くの死傷者が出て「血税」の実態が明らかになりましたから、鎮台兵の戦闘意欲はとても低かったといいます。このような明治政府軍側の全体状況の中で、近衛兵は徴兵された兵士の中からの志願者で構成された、戦闘意欲の高い組織だったといいます。近衛兵は、御親兵を改組してはじまった組織ですが、次第に徴兵された兵士の中からの志願者で構成された組織になったのです。

反乱軍である私学校党側も、近衛兵の強さには一目置いていたと伝えられています。彼ら近衛兵が、士族の特権維持を目指す反乱軍に対して、特権の廃止と平等を守る自らの戦いとして「西南戦争」を戦った政治意識の持ち主と考えるのは、考えすぎでしょうか。

明治初年の国民意識

国民意識・民族意識は近代社会のもとで形成されるものです。日本では江戸時代を経ても国民意識・民族意識は形成されていなかったと、評価されています。幕末期にあたる１９世紀後半では、1853（嘉永6）年のペリー来航以来の政治状況を、当時の「志士」たちは「己丑以来」ということばで捉え、「万国対峙」という将来方針を共有していたとされています。「万国対峙」の最も過激な実施が、欧米人殺傷というテロや公使館焼打ち、さらに長州藩などの外国船砲撃などの攘夷実行でした。その対極には将来的な攘夷実現を目指す武備充実策がありました。これは即攘夷実行ではなく、そのための造船などの軍事産業振興や技術導入を含める実際上の開国策でした。明治政府による開国和親、文明開化、富国強兵策はその政策の延長線上にありました。しかし、このような考えは「志士」（一部の指導者）だけのものであって、この時期には、まだ日本人としての国民意識・民族意識は形成されていなかったと、私は理解しています。

それだから、徴兵が過酷な賦役である「血税」として国民の多くから忌避されることになったと思われます。

明治維新をとおして国民意識・民族意識が形成される機会はありました。それは、「市民革命」をとおしての国民意識・民族意識の形成という過程を経る可能性です。しかし明治維新は市民革命を否定しました。いろいろと検討する要素はありますが、偽官軍事件とされる赤報隊がすすめた年貢半減などで農民を巻き込んだ政治革命に進むことを否定し、武士の手による倒幕と明治政府の設立で終わりました。

この時代、地方の豪農層は各地の瓦版を収集して情報を集めていたことを、東大史料編纂所の人の講演で聞いたことがあります。当然、この情報は村の中に広まったはずですから、明治政府の姿勢は伝わっていたと考えられます。農民たちは、その明治政府が設けた新しい賦役である「血税」＝徴兵を忌避したのです。

自由民権運動とのつながり

このような全般的状況のなかで、特に志願した兵士たちである近衛兵たちは、明治政府を信頼していた数少ない人びとだったはずです。

また、この「竹橋事件」の取調や裁判の過程で、兵士たちが自らの主張を堂々と述べたことが記録されている。農民出身の20歳代半ばの若者たちが、責任を他に転嫁したり、免罪を求めることなく、強訴を当然のこととして主張した姿勢は後の自由民権運動につながってゆく思想として、これから調べ考えることで、これからの課題が広がります。

なお、「竹橋事件」で大きな衝撃を受けた明治政府は、軍人の規律強化を図るため、処刑の３日前の10月12日に「軍人訓戒」を発布し、４年後には「軍人勅諭」さらには「教育勅語」の制定（1890明治23年）へとつなげていきました。その結果、日本の軍隊では、兵士の組織的反乱は起こらなくなりました。そしてこれは、この後の日清戦争（1984明治27～1985）から第二次世界大戦の敗北（1945昭和20年）に至る日本のあり方を創りあげていったとも言えます。先に挙げた日本の民族意識は、日清戦争を契機に形成されたわけですが、この時期に国民を導いたとされる三井八郎右衛門、岩崎久弥、渋沢栄一、福沢諭吉、東久世通禧は、日清戦争支援のために「軍資醵集」の先頭に立ちました。

「軍資醵集」運動は、緊急勅令による「経費支弁のため」の「公債募集」がはじまって頓挫しましたが、福沢諭吉は中層、下層の民衆がささやかな義捐金を献金する運動を進め、称えています。このような流れのなかで、戦争のための動員がはじまると、軍夫に応募する運動が広まり、多数の軍夫が従軍しました。こうして清国を敵とする国民感情を高めるなかで、民族意識が形成されてきたのです。

「竹橋事件」は、明治維新を経た日本を伊藤博文や山県有朋たちの新政府が、どのような国にしたいかを示した事件として記憶にとどめたいと思うのです。

やじ馬四代

我が家の家系から近代史をたどる

小　澤　拓　美

どうもわが家系にはやじ馬好きが多いようである。これは、子どものころから聞かされた、わが家系のやじ馬の記録である。私の父系の先祖は、越後国頸城地方の貧しい農家だったらしい。そして江戸時代後半に「与兵衛」が仏壇を背負って江戸に来た、そうである。これがいつの事か定かではないが、わが家に残る過去帳で最古の男性（法名：法雲了達）は寛政２年２月没とあるので、この方が俗名：与兵衛だとすると、江戸に出てきたのは1760～70年代即ち明和のころだろうか。明和元年には20万の農民が助郷制度に反対し江戸を目指した伝馬騒動が起こるなど、幕藩体制の揺らぎが見えてきた時代である。与兵衛は、やがて日本橋の一角に呉服商の店を構えるようになり、「三河屋」を商号とした。いまだにわが先祖の墓碑には、「三川与」と刻まれている。

その数代のち、幕末の当主は「秀次郎」と言った。私の曽祖父である。1855（安政２）年に江戸で起こった「安政の大地震（江戸大地震）」のことを、後々まで語ったということなので、明治維新を30代くらいで迎えたのだろう。「秀次郎」の妻が「よね」である。「よね」は、大正時代の末まで大変長生きをした。そこで、1901（明治34）年生まれの孫（私の父）に、いろいろ昔話を聞かせたそうである。

やじ馬　その１

上野戦争

私の父が、その祖母にあたる「よね」からもっとも聞かされたのは、上野戦争のことである。慶応４年4月11日の江戸城無血開城ののち上野の山に立てこもった約４千名の彰義隊に対して、大村益次郎率いる新政府軍が5月15日総攻撃を仕掛け即日制圧した。おそらく１０代後半と思われる「よね」は、彰義隊の後方支援にあたったそうである。握り飯などを運んだのだろうか。しかし、根岸方面に敗走する彰義隊を追った新政府軍の手によって、後ろから斬られ、背中に深い傷を負った。私の父は、祖母「よね」から何回も背中の傷跡を見せられた、とのことである。

上野戦争の後方支援に女性が参加したとの記録は、歴史関係の文献で読んだことはない。地元の伝聞記録などにないか、台東区立図書館で郷土資料を漁ったが、いまのところ見つかっていない。「よね」に「やじ馬」といっては失礼かもしれない。江戸っ子から言えば、「攘夷」など嘘っぱちのスローガンを掲げた侵略軍である薩長勢力に果敢に立ち向かう彰義隊に対する精いっぱいの応援であったであろう。新政府軍の苛烈な追跡を逃れて、会津へ箱館へと多くの旧彰義隊員が逃亡したが、この背後には民間の支援がさまざまあったことと思う。

私が子供のころ、行楽がてら親に連れられて何回も行ったのは、上野公園にある「彰義隊の墓」である。西郷隆盛像の説明を受けた記憶はないが、そのすぐ後ろにある「彰義隊の墓」には、いつ行っても香華の煙がもうもうと立ち込めていた。今では驚くことに、あの狭い敷地に「彰義隊記念室」という、写真や遺留品などを展示したコーナーがあった。明治から昭和30年ころまで、ここは旧江戸っ子にとって、東京最大の聖地であった。

……

「秀次郎」「よね」の息子が、私の祖父にあたる「久次郎」である。この家系は、どういうわけか

長男に「〇次郎」と命名する。おそらくどこかで分家したか、あるいは長男が若死して次男が継いたと推測される。しかし、「久次郎」が受け継いだ呉服商経営は次第に難しくなっていった。父の話では、すぐ近くの白木屋（のちの日本橋東急）に負けた、とのことである。日本が日清戦争・北清事変・日露戦争と軍国化を進めていたころである。

やじ馬　その2

日比谷焼き討ち事件

1905（明治34）年日露戦争を終結させるポーツマス条約が結ばれた。多くの戦死者を出したこの戦争は、日本側の一方的勝利とはいいがたいが、日本は戦争遂行能力の点から早期の幕引きを考えた。しかし、奉天会戦の実情や、戦費調達のことを知らされていない国民は、アメリカの仲介による講和条約を弱腰の外交と受け止めた。かくして講和条約に調印した全権小村寿太郎が帰国するや、激しい講和条約反対運動が起こった。9月5日東京の日比谷公園では、野党議員が反対決起集会を開こうとした。警視庁は禁止命令を出し、公園入り口を封鎖した。怒った民衆たちが日比谷公園に侵入し、一部は銀座に向かい政府系の国民新聞社を襲撃した。大臣官邸や警察署などが破壊され、東京市内13か所以上から火の手が上がった。政府は戒厳令を布き、近衛師団が鎮圧にあたり騒動を収めた。この騒動による死者は7名であった。各地でも講和反対の大会が開かれ、神戸、横浜でも暴動が起こった。

この日比谷焼き討ち事件に「久次郎」は参加したそうである。これまた「やじ馬」というのは酷な話で、犠牲になった兵士や多額の戦費調達のために大増税を強いられた国民を政府高官は見捨てるのか、といった正義感に基づくのだろう。時の政府からすれば「実は英国に助けられた見せかけの戦勝だった」とは今さら言えないだろうが、後の太平洋戦争の時の嘘ばかりの「敵戦艦〇〇隻撃沈！」等のインチキ報道の端緒がここから始まるとも考えられる。

祖父の印刷業創業のこと

このころ世の中には様々な新しい商売が生まれていた。私の祖父「久次郎」は、長崎に始まった印刷業に関心を持ち、東京で初めての印刷会社である「秀英社」に小僧として入り技術を学んだ。「秀英社」は現在の「大日本印刷ＤＮＰ」である。技術を身に着けた「久次郎」は、先祖以来の呉服屋を閉じて新宿に移転した。

1911（明治43）年新興の新宿駅前に開業した「小澤印刷」は、当時の東京府豊多摩郡における唯一の印刷屋であった。「久次郎」の子であり私の父である「新次郎」も尋常小学校を卒業してすぐ家業を手伝い、印刷技術の修業を重ねていった。

元号が昭和と変わるころ、1920〜30年代に「小澤印刷」は順調に発展を遂げていった。経営形態は「合名会社」となり、新宿駅前の旧工場には営業店舗だけを残し、西武新宿線の中井駅前に数百坪の土地を購入し工場と住居を置いた。当たり前だが、当時は名刺・年賀状・宣伝チラシもすべて印刷屋に頼むしかない時代である。収益は大いに上がり、多くの従業員を置き、昭和初期には東京でも珍しい自家用車を所有したそうである。このころの顧客には、のちに首相になった海軍大将岡田啓介をはじめ各界の著名人がいた。当時の印刷物は、私の手元に少し残っている。

やじ馬　その3

二・二六事件

私の父である「新次郎」が30歳を越え、印刷屋の若主人として一人前の仕事を始めたころ、日本社会は急速に暗い方向にかじを切り始めた。

1936（昭和11）年2月26日未明、皇道派の青年将校が「昭和維新・尊皇斬奸」を旨として決起。歩兵第1連隊等を指揮して、首相官邸・警視庁・内相官邸・陸軍省等を占拠した。官邸を襲われた岡田啓介首相はかろうじて難を逃れた。反乱部隊

は首相官邸・山王ホテル等を宿舎とした。28 日早朝、「蹶起部隊を原隊に復帰させよ」という奉勅命令が戒厳司令官に下達された。午後 4 時、戒厳司令部は武力鎮圧を表明し、翌 29 日早朝の攻撃開始を下命した。反乱部隊も包囲軍を迎え撃つ体制をとった。

29 日早朝、攻撃開始命令が下された。戒厳司令部は近隣住民を避難させ、反乱部隊の襲撃に備え中央放送局を憲兵隊で固めた。ラジオで「勅命が発せられたのである」に始まる勧告が放送され、「勅命下る軍旗に手向かふな」のアドバルーンが上がる。

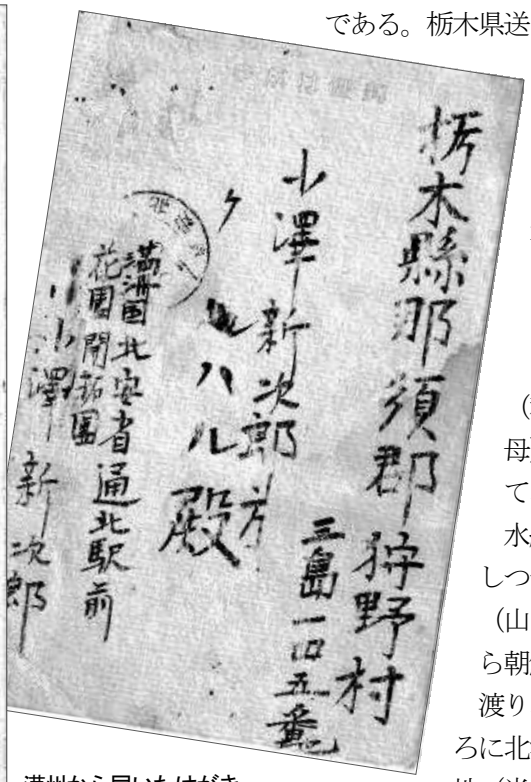
その午後、反乱部隊の下士官・兵は原隊に復帰、野中大尉は自決、残る将校らも夕方には逮捕され反乱は終った。同日、北・西田ら民間人メンバーも逮捕された。

この「二・二六事件」のさなか、父「新次郎」は見物に行ったそうである。反乱軍と政府軍が対峙していた赤坂通りに出かけたとのこと。両者が銃を手に静かににらみ合う中をゆっくりと歩いて通り過ぎた、と自慢げに話してくれた。まさに「やじ馬」であるが、これが何日のことかは聞きそびれた。上記したように 29 日朝には近隣住民を避難させた、とあるから、27 日あるいは 28 日のことだろう。

満蒙開拓とソ連軍収容所からの脱走

父「新次郎」の会社経営は、その後も順調であったが、世は日中戦争から対米戦争の時期に入る。1943（昭和 18）年になると、空襲への備えが言われるようになる。「新次郎」は一大決心をして、東京を離れる「挙家疎開」をすることとした。新宿駅前の店舗、西武線中井駅横の工場を売却して、栃木県那須野が原の狩野村（当時）に田畑と住居を求めた。ここは、明治期に三島通庸の開いた「三島農場」の一角である。

しかし、戦況は悪化の一途をたどり、本土が戦場になることは時間の問題と感じられてきた。1945（昭和 20）年の春に「新次郎」はさらに安全地を求めて、時の政府が推進する満蒙開拓の拡充策に乗った。ソ連との国境に多くの日本人開拓団を配置して、北方の防衛ラインの強化を図ったのである。栃木県送出の「花園開拓団」に加わった「新次郎」は、さしあたって母親「ヒデ」（私の祖母）も連れて、米軍潜水艦を警戒しつつ須佐港（山口県）から朝鮮海峡を渡り、6 月ころに北満の開拓地（当時名：満



満州から届いたはがき

州国北安省通北）に着いた。到着のハガキは現在私の手元にある。この７月に那須の留守宅で、私は誕生した。その２週間後にソ連軍が満州に侵入、8 月 15 日に太平洋戦争は終結した。

「新次郎」らは多くの犠牲者を出しながら南満州に逃亡した。しかし炭鉱の町・撫順でソ連軍の収容所に入れられた。劣悪な収容所生活のなかで母親「ヒデ」がなくなり、父は収容所の林で自ら焼いて骨にしたそうである。その数ヶ月後、「ヒデ」の骨をかかえて収容所を脱走した父は、撫順の街の中国人印刷屋に雇ってもらい帰国の時期を待ったそうである。

敗戦後の日本国内では、大陸の情報は全く途絶えた。私の母らがいる那須の留守宅では当然死んだと思われていた「新次郎」が、「ヒデ」の遺骨を抱えて九州佐世保の旧海軍基地（現ハウステンボス）に帰ってきたのは 1948（昭和 23）年の頃らしい。汽車を乗り継ぎ、東京の石神井に残していた別荘にたどり着き、ようやく那須の留守宅に連絡を取った、とのことである。

それから２年ほどのち、５歳ほどになった私は長兄に連れられて、西那須野駅から東京に向かった。生まれて初めて汽車に乗り、利根川の長い鉄橋をゴトンゴトンと渡ったときの言いしれない「不安・期待」を昨日のように思い出す。石神井の別荘についたのは、もう夜になっていた。薄暗い部屋に、見知らぬ中年男性がいた。「お前のお父さんだよ」と紹介されたのが、父との初の出会いであった。

焼野原に印刷会社をたてる

「新次郎」はその後、再び東京で印刷業を起こした。まずは焼け野原にバラックが並び、米軍ＭＰが交通整理をする新宿駅前で、戦前あった近くに事務所を開設、石神井の住まいに仮工場を作り「株式会社」として再建した。1952（昭和 27）年に新宿区大久保に工場兼住宅を建て、ここで私は小学校１年の途中以降を過ごすことになる。

父の口癖は「信用」だった。再建した会社には、戦前の顧客のほか新規に多くの客が来てくれるようになっていた。著名人としては、作家の舟橋聖一・版画家の棟方志功などがいる。中近東史の研究者でもある三笠宮（昭和天皇の弟君）が主宰する「オリエント」という雑誌も長く印刷していた。三笠宮さんはご自分ですべての原稿に目を通し、校正するためによく来られていた。子供だった私はお茶出しなどさせられたが、特別の気遣いをする必要はなかった。当時人気歌手だった三橋美智也の「後援会通信」を印刷していた関係で、ご本人が挨拶に来られたこともあった。この時は近所の人が集まって大騒ぎしていた。芥川賞候補にも挙げられた作家豊田四郎のお宅がすぐ近くということもあり、その妻で歌人の森村浅香さんが主宰した短歌集もずっと我が家で印刷していたので、その娘で「天国に一番近い島」の著者森村桂さんも子供の頃からよく来ていた。

某私立大学の入学試験問題を印刷するときは、工場全体がピリピリしていた。印刷機の周りを何人も教授が取り囲んで、機械のトラブルで一枚でも失敗紙（業界用語で「ヤレ」という）が出ると、すぐさま処分していた。規定枚数の印刷が終わると、その場で原版を解体した。「新次郎」は、会社の規模を徐々に縮小したが現役社長であり続けた。登山を趣味として、82 歳の時に母と二人で八ヶ岳主峰赤岳（2899m）に登った時、偶々取材に来ていた「岳人」という雑誌記者に取材を受けて、記事になった。86 歳まで元気に仕事を続け、97 歳で死去した。

倒産の危機を乗り越え

その子、つまり私は前述のように、栃木県西那須野郡狩野村（当時）で大戦末期の 1945（昭和 20）年７月 28 日に生まれた。広島の原爆投下まで１週間、終戦まであと２週間である。５歳で上京し初めて父なる人に会い、石神井の小学校に入学したが半年で新宿区立小学校に転校した。小中学生のころは、ひたすら家業を手伝った。零細企業は、家族労働なしには成り立たない時代であった。眠さをこらえて深夜まで働かされた記憶はあるが、「勉強しろ」などとありがたい言葉を親からかけ

てもらった覚えはただのひとつもない。

小学校５・６年になるといっぱしの営業係気分であった。嬉しい思い出がある。品川の方の顧客に、製品の印刷物を届けたことがあった。先方の社長に請求書を出したが、当時のお金で１万円位だったと思う。物価水準から言うと、現在の20万円以上か。社長は、私の目の前で、父に電話をかけ「こんな子供に渡していいのですか？」と聞いていた。電話を切った社長は、「お父さんは『その子は絶対信用できるから渡してください』と言ってたよ」と、支払いしてくれた。

中学１年の時に、わが社は倒産の危機に瀕した。業績は順調だったが、経理を任せていた社員が多額の持ち逃げをしたのである。零細ではあるが、一応株式会社であったので臨時の株主総会が開かれた。すべての株主は親戚なので、要するに親族会議である。ここで後継者がいれば株主つまり親戚一同が再建援助をする、ということになった。急に中学生の私が、その席に呼ばれて「どうだ、あとを継ぐか？」といきなり聞かれた。おどおどと「はい、やってもいいですが・・」と答えざるを得なく、会社は規模を縮小し父母だけで継続することとなった。

その後、懸命に働いたのがたたったのか、その年の夏頃に父は倒れて入院した。

工程途中の印刷物がいくつかあったが、母は私に「何とかならないか？」と言った。当時の活版印刷機は６畳くらいの大きさだった。チビだった私は轟音を立てる印刷機に必死にしがみつき、膨大なヤレを出しつつ、いくつかの注文品を仕上げて納品した。そのご褒美もあってか、暮に青森県下北半島にある大湊の親戚に１週間の旅行に出してくれた。まだ、蒸気機関車の時代であった。大雪の降り積もる野辺地で乗り換えるなど、中学１年の一人旅を満喫した。

中学はまじめに通ったが、父の体調が回復してくると、学校帰りに寄り道をして帰ることが多くなった。親しい友人たちと戸山ヶ原や早稲田大学周辺を歩き回り、おしゃべりして過ごすことが楽しみであった。特に、のちに東京芸大洋画科・同大学院を卒業し、雑誌社・出版社と契約してイラン・スペイン・モロッコ等イスラム圏を舞台としたいくつもの雑誌特集や写真集を出すなど活躍した赤地経夫君（2017年没）とは生涯の友となった。

やじ馬　その4

日米新安保条約国会前デモ・維新行動隊事件

1960（昭和35）年６月岸信介内閣は、日米安全保障条約の改定をもくろんだ。独立したにもかかわらず、日本に期限もさだめずにアメリカ軍を駐留させるこの新条約に反対する声は日増しに高まった。衆議院での強行採決後、全国の都市や国会周辺でのデモが続いた。

６月15日にはおそらく近代日本史上最大の大衆示威行動が、国会周辺で起こった。この日、中学3年生だった私は、ひとりで国会周辺に出かけた。教わっていた教師がデモで逮捕されたという報道もあり、特にこの日は「なにかとんでもないことになりそう」という好奇心から出かけた。まさにやじ馬である。国会周辺に近づくと、様々な職種の旗を掲げた労働組合員・様々な大学の旗を掲げた学生など、おびただしい人々が「アンポハンタイ」を連呼しながら道路を埋め尽くしていた。

中学校の制服に、下駄履きという見物姿の私は「どこか高いところから」と参議院議員会館のレンガ塀（現在は改築されて存在しない）によじ登った。しばらくすると、デモ参加者のなかから異様な叫び声が起こった。見ると、左側つまり永田町小学校（当時）方面からトラックが２台かなりのスピードで、ぎっしり道路を埋め尽くしたデモ隊に突っ込んできた。トラックの荷台には、十数人ずつの若者が日の丸の鉢巻きをして、手には棍棒（あとの報道で分かったが、くぎを何本も打ち込んでいた）を振り回しながら、なにか叫んでいた。デモ隊がかろうじて真ん中を開けようとしたが、何人もがトラックに引きずられた。「あっ」と思った瞬間、運転していた男が、ブレーキを踏ん

だ。荷台に乗っていた、日の丸の若者たちは棍棒を振り回しながら荷台を飛び降り、手近なデモ隊になぐりかかった。運悪く俳優たちのデモが近くにいたために何人もの女性が頭から血をだした。そうすると、次の瞬間デモ隊が反撃に出て、トラックをゆすって横倒しにした。

これが、その後裁判にもなった「維新行動隊事件」である。恐れをなした私は早々に国会前を引き上げて帰宅したが、ラジオは一晩聞き続け、東大生樺美智子さんが亡くなったニュース速報も聞いた。

新安保条約が参議院の承認なくして自然成立したのは、それから２日後である。

家業を継がなかった私の時代

私はそのころから割と無口になったように思う。中学の国語教師の影響もあり、あちこち小説を読み漁るようになった。我が生涯最も恩に着るのは、この甘利実先生である。高校に行く気もなく、漱石・芥川などを読む日が多かった。

担任の薦める高校に行くには行ったが、あまり勉強はしなかった。しかし、新田大作先生（のち実践女子大教授）の厳格な漢文授業だけはよかった。この先生は、授業中に教科書そのものを一切使わない。すべての生徒は、事前に教科書の漢文を返り点なしの白文にして原稿用紙に書いたものを持ってこなければならない。ある定期試験のあと、答案を返され講評をするときに、先生は「小澤！解答を読め」と言われた。私が読むと、「このように書かなくてはならない」と言ってくれた。教師に褒められたことのめったにない私の宝の思い出である。これで好きだった漢詩がますます好きになった。（つまらぬ自慢ですが、現在詩吟３段です。）

また、下校途中にいつも寄る寺の縁側で、ロシア文学等をよく読んだ。大学は、とにかく家を離れたところに行きたいと思った。このころ母は「お父さんは後を継いでほしいようだけど、自分で好きにしていいんだよ」とこっそり言ってくれた。家からなるべく遠くに、できれば北大に行きたいと思った。しかし暖房費がかかり、金欠のとき家に帰るのも手間取るだろうと諦め、千葉大にした。他の大学はどこも受けなかった。

大学教育そのものから得られたものは殆どないが、多くの知己を得たことは大きい。特に、歴史サークルに参加して様々な友人を得られたことは、本当に良かったと思う。もうひとつ大学時代でよかったことは、アルバイトで約 20 職種を経験したことである。特に測量技師（助手）の仕事は楽しく「君は向いているよ、技師の資格取ったら」と言われたくらいである。

東京都の教員採用試験に受かったあと「とにかく家から離れたところに」と島嶼を希望し、八丈島に赴任した。「家業を継ぐ」との、中学生以来の約束は反故にしてしまったが、父は諦めたようで何も言わなかった。結局、教諭・教頭・校長を併せて都立高校７校を経験して退職した。ろくでもない教師だったが、近づいてきてくれた多くの生徒と、助けてくれた同僚達に恵まれた。その後は都教育委員会に少し勤めたが、満員電車通勤に懲りて辞職、友人の誘いで岩手にある医科大学に勤務した。その後、５年間勤めた大学もやめて、現在はある社会福祉法人で知的障害者の皆さんと主にスポーツをする仕事を楽しくやっている。

やじ馬　その5

中国：文革の終焉
ドイツ：東西分断の終焉

もうひとつ、私のやじ馬経験と言えるのは 1980 年代の中国旅行だろう。まずは文革が終わって３年ほど、漸く海外観光客の受け入れが始まったころの 1983（昭和 58）年春だが、北京でも西安でも男女問わずひとり残らず人民服の中国であった。私が安物のジャンパーを着て街を歩いていると「これをどこで手に入れたのか？」と人だかりがした。外国人が訪れることが出来たのは、31 都市だけだった。しかし町のなかは意外に自由で、北京から一人で路線バスに乗って盧溝橋を見にいっ

たりした。橋のたもとには、銃を持った兵士が立哨していた。

洛陽から龍門の石窟寺院を訪れた際は、まずは入口にある研修所で「この遺跡は共産主義革命にいかなる意義があるか」といった話を延々と聞かされてからの拝観だった。田舎の村は、さらに文革の名残があり、「大隊長」と呼ばれる女性村長による「共産主義革命における農村の役割」みたいな講演を拝聴してから村内見学だった。小学校教室の正面には毛沢東肖像が掲げられており、村内では高床式の２階が住居、床下に豚を飼っている家を何軒も見た。

今では考えられないことだが、文革の時に史跡をさんざん破壊した風潮が残り、どこの遺跡でも入り放題、さわり放題だった。

その４年後 1987（昭和 62）年には旧満州を訪れた。ハルピン駅では、伊藤博文殺害現場をプラットホーム・貴賓室など現場検証まがいに見て回った。７３１部隊の本部見学は実に気が重かった。撫順では、かつて訪れた筑豊や夕張とは比較にならない規模の、露天掘り炭鉱に圧倒された。そのあと街に入り、父が世話になった印刷所を探してみた。出発前に父に書いてもらっていた地図の場所に印刷屋があった。中国語のできる同僚に通訳してもらって父のことを聞いたが、経営者が代わっていて「戦後すぐのことはわからない」とのことであった。

この後、柳条湖の「満鉄爆破事件」の現場に行き、日本が作った記念碑が倒されたまま草にうずもれているのを見た。現在は、中国が作った記念碑が立っているはずである。さらに「張作霖爆殺事件」現場に行こうと、近くでいくら聞いてもわからない。引率の中国人通訳があちこち聞いてくれて、ようやく現場にたどり着いた。

さらに４年ぶりに北京にも寄ったが、スカート姿の女性がいて、びっくりした。共産主義スローガンに代わり「街をきれいに」といった張り紙が多くてこれもびっくりだった。

また、ベルリンの壁崩壊直後の 1991（平成３）年夏には、一人旅でドイツに行った。フランクフルトからベルリンまでの列車の切符の値段が、行きと帰りで何倍も違う、車掌によっても値段がまるで違うなど、まさにめちゃくちゃだった。恐れをなした私は、やじ馬根性を捨てて、ほうほうの体で南ドイツからスイスへと逃げ出し、のんびりとユングフラウヨッホの氷河やアルプスの裾野散策を楽しんだのであった。

そして今世紀、大震災とコロナ禍

かつて 21 世紀は夢の世紀のように語られたが、実際はどうだろうか。阪神大震災２週間後の神戸の街を東から西に歩いて横断した（陸上を行くには歩くしかなかった）時も恐怖を感じたが、2011（平成 23）年の東日本大震災の時は気が遠くなるほどの衝撃だった。このときは３月後半に盛岡にある大学の会議に行かなくてはならなかったが、一切の交通が途絶していた。新幹線開通は半年も先であり、ようやく５月初めに長距離バスで行けるようになった。

そして大学の仕事を終えた帰りに「ボランティアでもできるかな」と軍手・長靴などの基本的道具を持って三陸の海岸に向かった。しかし、あまりの惨状に、どこでも呆然と立ち尽くすのみだった。福島の原発あたりはとても怖くて近づけなかったが、ここは震災というより人災というべきであろう。

そして、2020（令和２）年には全世界に広がるコロナ禍である。どうも、21 世紀になってからの 20 年程はつらいことが多すぎる。

しかし、希望の光がないわけではない。ノーベル平和賞を受賞したパキスタンのマララ・ユスフザイさん（1997 年生）や、環境問題に体を張って発信しているスエーデンのグレタ・トゥーンベリさん（2003 年生）などの主張と行動には目を見張るものがある。

お二人のように地に足をつけて、地球・環境・人間・生き物を大事にする動きが世界に広まることを願いつつ、駄筆を置きます。

私にとっての缶詰

郷里の産業を語る

多田統一

私は、徳島県南の阿南市に生まれた。阿南市は、タケノコの産地である。市内にある県立の新野（あらたの）高校が甲子園に出場した時、NHKのテレビ中継で打撃好調なことをタケノコ打線と紹介された。名門の横浜高校に、逆転で勝った試合もある。

かつて、阿南市では毎年4月半ばを過ぎると、一斉にタケノコ缶詰の製造が行なわれた。小学生の頃、祖母が農協工場に勤めており、通学途中私によく手を振ってくれた。多くの工場が、タケノコ時期だけの季節操業だった。当時、中小零細な缶詰工場が市内に50程あった。日本缶詰協会でも、この実態は把握されていなかった。製造業としてではなく、農家副業が多いため市役所の農業センサスの個票で確認しなければならなかったからである。

まず、どうして阿南市に缶詰工場が集積しているのかという疑問が出てくる。工場分布図を作ってみると、市内でも福井・新野地区に集中している。いずれも、タケノコ栽培の盛んな地区である。明治後半期大阪から技術が導入されタケノコ缶詰の製造が始まったが、豊富な原料と農家資本、近隣の安価な女性労働力という条件がこの地区にはあったからである。多くが副業経営で、農家の屋敷内に小屋を建て、大きな鍋とはんだ付けの装置があればよかった。200～300万円の投資で済んだ。タケノコは、水煮にして18ℓ缶に詰め、業務用として京阪神の問屋に販売された。直接消費者に渡るのではなく、企業や学校の給食センターに運ばれ調理された。

次に、なぜ阿南市では中小零細な缶詰工場の経営を維持できたのかという疑問が出てくる。これには、タケノコという商品特性によるところが大きい。タケノコは、加工の過程で先が折れてしまうことがある。そうなると、商品価値が下がる。つまり、機械化ができないということである。手作業にかかる部門が多く、高齢の安価な女性労働力が地区内で確保できたことも大きかった。大手資本が進出するには、その条件が揃っていなかったのである。また、タケノコ加工が農家経営として行なわれてきた強みもあった。自家栽培のタケノコを使うことができたし、生出荷との価格の調整もできた。阿南市では、気候的に4月20日頃を境にして一挙にタケノコの生出荷価格が下落する。孟宗園では、タケノコがどんどん生えてきて、ほっておくと伸びて竹になってしまうからである。水煮加工することにより、少しでも付加価値を付けたいと願うタケノコ農家の知恵がここにあった。米や野菜などとの多角経営なので、少々の景気変動にあってもその波を乗り越えてきた。市内の醤油醸造業者がタケノコ缶詰の経営から撤退したケースとは違う。

現在、タケノコ缶詰は中国からその多くが輸入されるようになった。それでも、わが家は郷里のタケノコ缶詰を食べている。実家には竹林があり、毎年春にタケノコを収穫する。父が元気だった頃、〝多田農園〟ブランドのタケノコ缶詰を委託製造していた。その父の口癖が「タケノコを食べると背が伸びる」であった。子どもの頃、必死にタケノコを食べたが決して今以上にはならなかった。残念である。しかし、タケノコは繊維質のため、体重の方だけは標準を維持できているのだが――。

訃報

滝沢順先生は2021年1月29日、８８歳にてご逝去されました。前号の『古い地図で旅する』は最後のご執筆なのかもしれません。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

映画から見る近・現代の歴史

高校教員退職後カルチャースクールで世界史講座を担当してきました。講座は何ヶ所かで、基本的には月１回。通史ではなく「主題学習」のような形でカリキュラムを組んできました。参加するメンバーの年齢構成や男女比によりテーマは「食」「音楽」「地図」「ワイン」など・・・。ここ数年は映画や小説を切り口にして歴史の一場面を扱ってきました。

ここでは公開が比較的新しい「映画」をとりあげ、歴史のどの局面の理解に供したかを述べることにします。時代、地域については整理されていません。映画は図書館やレンタルショップで借りられるものを選んでいます。まだ見ていない方はどうぞご覧ください。

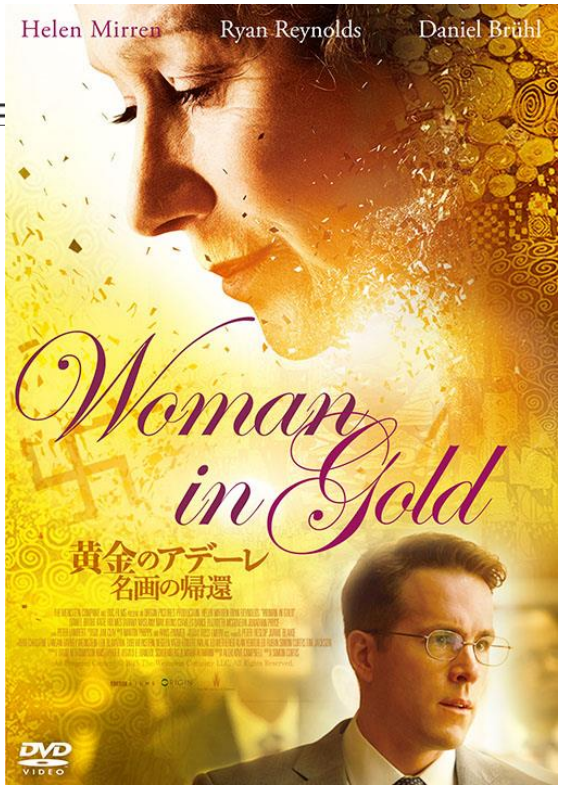
村　木　逸　子

①　「セブンイアーズ・イン・チベット」

1997 年のアメリカ映画です。アイガー初登頂のオーストリアの登山家ハインリッヒ・ハラーの自伝を原作としています。1939 年（オーストリアはすでにヒトラードイツに併合されています。ハラーはナチス党に加入していました）ドイツの威信をかけてヒマラヤ登山に向かいますが雪崩に遭い、登山隊は下山。ハラーは単独で挑戦し、失敗。彼はインドで＜イギリス帝国内の敵国人＞として捕虜になります。収容所から何度も脱走しようとして失敗し、1942 年チベット経由の脱走を試み長い距離を瀕死の状態でさまよい、巡礼隊に潜り込みラサに入ります。1949 年から 1951 年までダライ・ラマ 14 世の「世界の科学の教師」として変動期のチベットのラサ・ボタラ宮に滞在します。1951 年は中国共産党・人民解放軍がチベットに進軍した年でもあります。

チベットの歴史、ボタラ宮の内部、ラマになるための儀式、人民解放軍の支配などを知ることの出来る映画です。ダライ・ラマ 14 世が国外に亡命したルート、亡命政権を樹立した場所はどのような地理的条件にあるかなどチベット近代史を知る足がかりになる映画です。

尚、この映画の紹介を「同時代史の会」で行いましたところ、本会の会員でもある駒井真氏がハラーの登山について、チベットについての日本人研究者の業績、チベットのラマ教、モンゴルのラマ教などについて研究を進め報告されました。



『黄金のアデーレ名画の帰還』DVD ジャケットより
発売・販売元：ギャガ　提供

②　「黄金のアデーレ、名画の帰還」

2015 年のアメリカ・イギリスの映画です。

①で触れた登山家ハラーがオーストリアを出発した時期にオーストリアで何がおこっていたか、有名な画家クリムトの描いた名画「黄金のアデーレ」にまつわるユダヤ人迫害の歴史の記憶を再生させる映画です。名画のモデルはウィーンの裕福

な実業家の妻アデーレで、絵はナチスドイツの占領時に没収され、美術館に収蔵され、戦後はオーストリア政府の所蔵になりました。辛うじて危機を脱出しアメリカに亡命したアデーレの姪が死亡した（1999 年）後、妹がその絵の所有権を求めてオーストリア政府に対し裁判を起こすストーリーです。戦間期ウィーンにはユダヤ系の実業家が多く、ウィーンの中心部に住居を構えていました。それらの裕福な家族の面々がクリムトのスポンサーであり、絵のモデルでした。ドイツによる併合後、その屋敷街で多くのユダヤ人が道路の掃除など強制的な作業を命じられ、ついには家も奪われ、収容所に送られた歴史が追想されます。絵画の所有権はどうなるのか、オーストリア政府の責任は、ナチスに協力した人々の子孫はこの歴史をどうとらえて今を生きているのか・・・・など、華やかなシーンの多い画面からオーストリア政府と国民のユダヤ人迫害の歴史とその責任を問いかけている映画です。

『ライフ・イズ・ビューティフル』（LA VITA È BELLA）と『遙かなる帰郷』パンフレットより

③「ライフ・イズ・ビューティフル」

1997 年、イタリアの映画です。

第二次大戦時のイタリアは、当初は枢軸国の一員としてナチス・ドイツと協力体制にありました。しかし、ムッソリーニ政権崩壊後はドイツの占領下に置かれました。ドイツからの解放を求める戦いがパルチザンによって行われ、その戦を描いた映画が数多くあります。

この映画はドイツの占領下で何があったか、その事実を、ユーモアを交えて描いた映画です。ユダヤ人は強制収容所に送られ、労働にかり出され、命を奪われます。映画ではその強制収容所がどこであるかはわからないのですが、故河島英昭教授の著書「ユダヤ人の風景」ではローマの中心部マッシモ劇場近くに古代から存続していたユダヤ人居住区の住民が突然徴集され、列車で「トリエステの収容所」に送られ、さらにその先はアウシュヴィッツ絶滅収容所に送られ、生き残ったものはほとんどいなかったという研究を残されています。泣き笑いのこの映画では「戦車に乗ったアメリカ軍が少年を救済するという」シーンでイタリアの解放はアメリカ軍を中心とする連合国軍によってであることをわかりやすく表現しています。

尚、パルチザン活動の途中に逮捕されアウシュヴィッツ収容所に送られたが、生き延びてソ連軍による解放で帰国できたプリーモ・レーヴィの帰国の行程を描いた映画「遙かなる帰郷」（1997 年、イタリア・フランス・ドイツ・スイス）は重いテーマを扱っている映画です。生き延びてアウシュビッツの体験を我々に教えてくれたレーヴィは、生き延びたことを罪悪と感じて生きていたのか、この映画の公開の数年後に自死の道を選びました。プリモ・レーヴィが育ち、生還したのは北イタリアのトリノです。彼はユダヤ系のイタリア人でした。

④「エクソダス・栄光への脱出」

1960 年、アメリカの映画です。

『エクソダス・栄光への脱出』と『遙かなる大地へ』パンフレットより

ヨーロッパ映画でもアメリカ映画でもホロコーストを記録した映画は数多くありますが、「エクソダス＝栄光への脱出」は製作されたのは古いのですが見直してみると示唆に富むシーンが多く出てくる映画です。ホロコーストを生き延びたユダヤ人たちがパレスチナを目指すが難民としてキプロス島に収容され止め置かれます。いかにそこから脱出して新しい居住地にいくか、ユダヤの歴史でエジプトから脱出し、荒野を彷徨い、約束の地カナーンにたどり着き、新しく居住地を作った歴史そのものを20世紀に再現させようと、脱出する船の名を「エクソダス」と名付け強引に上陸します。たどり着いたユダヤ人たちにはそこに居住していたアラブ系の人々との戦いが始まりました。統治責任者のイギリス総督は逃げていってしまいました。映画は、アラブ人とユダヤ人の共存が破られていくことで終わります。イスラエル建国についてあらためて知ることができる教材です。

「エクソダス」はユダヤ民族にとり永遠のテーマで、現在ではCGを多用して超スケールの大きい映像の同名の映画が作られています。2014年、アメリカ

⑤「遙かなる大地へ」(1992年アメリカ映画)
「ダンス・ウイズ・ウルブス」(1990年同)

どちらも今まで知らなかったアメリカ史の一面を知ることのできる優れた映画です。

19世紀のアメリカへの移民でアイルランド人が多かったことは周知のことですが、この映画の最初はアイリッシュが祖国でいかなる抑圧をうけていたかを、また着いた先のアメリカ社会でも底辺労働者としてやはり苦難の生活にいたことを描いています。

彼らの念願は西部に行き土地を所有することでした。しかし、19世紀の終わりにはフロンティアは消滅していました。その中で1830年の「インディアン強制移住法」によりインディアンを強制的に移住させ、そこに居住権を認めた準州がありました。合衆国は先住民のインディアンとの戦いに勝利すると、そのインディアン居住区にも入植を認める方向に転じました。

1889年4月22日、正午の号砲を合図に15ドルの入植手数料を払った者は好きな区画を自分の所有地として選び、旗を立てることが出来ました。馬車や馬に乗って我先にと土地を手に入れようとします。この競争は＜ランドラッシュ＞と名付けられました。このような乱暴な土地獲得競争は1893年まで毎年続けられました。こうして成立した州がオクラホマ州です。インディアンの人口は他の州より多いのですが、インディアンに保証された土地ではなくなりました。

古いミュージカル映画で「オクラホマ」というのがあります。見直してみると、入植者がインディアンを恐れているシーンが少しありました。し

かし、これは白人中心ののどかなオクラホマの田舎の映画でした。

「ダンス・ウイズ・ウルヴス」は先住民インディアン社会の文化をリスペクトした映画です。南北戦争で北軍の兵士だった男が旅の途中でスー族のインディアン社会に交じりその世界を知るというあらすじです。かつては西部劇で集団殺戮の対象として描かれた先住民への対応を大きく転換させた映画の始まりでもあります。現在のアメリカ史研究においては先住民インディアン社会を８つの文化圏に分けて生活の仕方、文化の特徴、食べ物の違いなどそれぞれの独自性を明らかにするようになってきています。

⑥「消えた声が、その名を呼ぶ」

2014 年　ドイツ・フランス等８か国による製作です。

第１次大戦中の 1915 年､オスマン帝国内でアルメニア人が大量虐殺（ジェノサイド）された歴史をテーマにした映画です。150 万人ものアルメニア人の殺害があったとされます。

アルメニア人の歴史は古く、紀元 301 年に世界で最も早くキリスト教を国教にした国として知られています。古東方教会系のシリア教会・コプト教会・エチオピア教会と並ぶ独自のキリスト教会です。アララト山を聖なる山としてその地域を治める国でした。ペルシャ、モンゴル、トルコ、ロシア等の大国の支配を受けて国力が弱かった時期もありましたが、アルメニアキリスト教を精神的支えにしてアレッポ・エルサレム・イスファハン・イスタンブルなどに逃れて住み商工業を生業にして生き延びてきました。更にニューヨーク、シンガポールなど世界各地でアルメニア教会を中心にコミュニティーを形成しています。今も民族の精神的支柱としてアルメニア教会の存在は大きいです。

19 世紀にはオスマン帝国の地域とロシア帝国の地域とにまたがって居住していました。トルコ人による虐殺（最近アメリア大統領はジェノサイドと規定しました）を逃れた多くのアルメニア人は国外に去り、あるいはロシアに逃げて（現在のアルメニア共和国）その文化を継承しています。現在アルメニアと言えば南カフカス地方にあって、隣のアゼルバイジャンとの間に紛争がある地域として新聞にも記事が出てくることがあります。ナゴルノ・カラバフ問題など聞いたことがあるでしょう。かなり民族色の強い強引さも持つ国です。

アルメニア人のディアスポラは世界各地に存在し、映画でも喉を掻き切られて声の出なくなった父親が拉致された双子の娘を探して、アレッポ、キューバのハバナ、アメリカのダコタなどに向かいます。アルメニア人コミュニティーを辿ったのだと思います。講座でアルメニア人のことを知ったある女性がアメリカを旅行した際にタクシーを利用したところ２回ともドライバーはアルメニア人で、タクシー業界にはアルメニア人が多いと教えて貰ったという報告をしてくれました。

『消えた声が、その名を呼ぶ』と『我が故郷の歌』DVD

⑦「我が故郷の歌」

2002 年、イランの映画です。

西アジアに居住している領土を持たない民族がクルドです。西アジアではアラブ、トルコ、イランに次ぐ人口（3000 万人）があるといわれています。紀元前 2000 年紀のシュメールの碑文にその名が見られるという古い歴史を持つ民族です。7 世紀からアラブ人の支配を受け、イスラム化が進み、16 世紀にはオスマン帝国とサファービー朝ペルシャの支配下におかれていました。しかし、この民族の不幸は、第一次大戦時のサイクス・ピコ協定で、国家として認められず、大戦後この地域はトルコ・フランス・イギリスに分割され、クルド人は現在では、イラン・トルコ・イラクに分散して住んでいる状態です。その生活実態がわからないのですが、この映画ではイランのクルド社会のミュージシャンを主人公として、難民となった人々の暮らしや民族の魂としてのクルド語の歌を誇り高く歌う人々を表現し、民族のアイデンティテイに迫る映画です。

西アジアで起こった湾岸戦争イランイラク戦争・シリア内戦などの歴史の中で、イラクの一部に 1992 年クルディスタン地域政府が発足しています。フセイン政府崩壊後、イラクの憲法でクルディスタンの自治が承認されましたが、IS（イスラム国）の台頭で自治政府は不安定であり、キルクークが油田地帯をめぐって係争の地になる危険が常にあります。

⑧「英国総督　最後の家」

2017 年、イギリス映画です。

民族と国家と国境については 19 世紀のナショナリズムの勃興以来世界各地で紛争や内戦、それによって起こる難民問題が多く発生しています。インド独立運動の父ガンジーについては有名な映画がありますが、「英国総督　最後の家」は独立が決定した後の国の在り方についてヒンズー教徒を主とする「インド・国民会議派」とイスラム教を主とする「インド・イスラム連盟」が対立し、調整が不可能になります、映画の中ではガンジーが匙を投げたシーンが出てきます。独立はインドと

『英国総督　最後の家』

パキスタンに分かれることになりましたが、協議が不調に終わると同時に、民族の大量の移動が行われました。イスラム教徒は東西パキスタンに、ヒンズー教徒はインドに、1400 万人の移動は大混乱をきたし、多くの死者を出し、国外に逃れる人も多かったということです。映画のその場面のスケールの大きさにいままで知らなかった歴史の重さを感じます。この映画を製作した監督は、祖父母が体験したこの大混乱の歴史を映画化し、記録に残しました。

近現代史理解に役立つ映画

その他、近・現代史を理解するために役立つ映画は数多くあり、講座で紹介させてもらいました。その例を以下に記します。

＊アフリカ

「遠い夜明け」（1987 年イギリス製作）

南アフリカ　アパルトヘイトと闘う人々の実話に基づく映画です。

「禁じられた歌声」（2014 年フランス・モーリタリア）

マリ共和国ティンブクトゥが舞台です。イスラム過激派の支配が砂漠を越えてアフリカの奥地にも広がり無謀で残忍な支配です。

「ジャッカルの目」（1973 年フランス製作）

アルジェリア戦争後、復讐を図るフランス人入植者のドゴール大統領暗殺計画を内容とします。

＊南アメリカ

「サンチャゴに雨が降る」（1975 年フランス・ブ

ルガリア）
「ネルーダ」（2016 年チリ・アルゼンチン・フランス・スペイン）
　世界最初の民主的選挙により成立したアジェンデ政権に対するクーデタと、成立した軍事政権と、世界的詩人であり社会主義政権にも参加したネルーダの死を絡ませて描いている。南アメリカの改革などに触れることができる。
「ローマ法王になる日まで」（2015 年イタリア）
　現在のローマ教皇ベネディクトスの若き頃の姿である。軍事政権下のアルゼンチンで反政府運動の学生や知識人を匿い、南米のカトリック教会の若い司祭たちの「解放の神学」運動にも理解をしめした日々を描いている。現在の教皇とカトリック教会の平和や貧困への対応を理解できる。
　✱東南アジア
「7 月 4 日に生まれて」（1989 年アメリカ）
　アメリカが敗北したベトナム戦争の実態を描いている。題名の 7 月 4 日はアメリカ独立記念日であり、愛国心にかられて海兵隊を志願した若者が体験した戦場の現実に恐怖を覚えるが、祖国での兵士への扱いもまた残酷であった。アメリカの反戦運動にも触れていて、アメリカ史を知る資料である。
「キリングフィールド」（1984 年アメリカ・イギリス）
　カンボジア内戦をニューヨーク・タイムズの記者の体験を通して見ている。クメール・ルージュによる理想主義的共産革命は大失敗だった。多くの犠牲者を出し、無益な戦争を続けたが実態はよくわからなかった。それを知ることが出来る映画で、カンボジア内戦を記憶することが出来る。
「レイルウエイ」（2013 年イギリス・オーストリア）
　第２次大戦、日本によるビルマ・インド侵攻のために必要としてタイメン鉄道を連合国の捕虜を強制労働させて突貫工事で作った。その苛酷な労働記録と、戦後に連合国軍の犠牲者の慰霊をおこなう日本人元通訳の行動にも焦点を当てている。それが映画「戦場にかける橋」（1957 年製作）が作られた時代からの年月を知らせてくれる。

　✱第二次大戦
　第二次大戦をテーマにした映画は数多くある。新たに知りえた事実、伝えなければならない記憶、そしてそれらを映画として表現する技術の発達によりこれからも多くの映画が作られていくであろう。
　「ウィストン・チャーチル」（2017 年イギリス・アメリカ）
　「ダンケルク　大撤退　」（2017 年イギリス・オランダ・フランス・アメリカ）
　＊　同名　（1964 年フランス）
　「プライベート・ライアン」（1998 年アメリカ）
　＊「史上最大の作戦」と同じ連合軍のノルマンジー上陸作戦
「アンノウン・ソルジャー　英雄なき戦場」（2019 年フィンランド）
　北欧の国でフィンランドはナチス・ドイツと同盟した。なぜ、ロシアを敵にしたか？

映画紹介の本

　世界史学習のため資料としての映画紹介については以下のような出版物がある。
「シネマウオーク　イン・ワールド・ヒストリイ」Ⅰ、Ⅱ　（山川出版社）
「映画で学ぶ世界史」（地歴社）
「世界史映画教室」（岩波ジュニア新書）
「ワールド・シネマ・スタディーズ」―世界の「いま」を映画から考えようー（勉誠出版）
　この本は国立民族学博物館の研究者を中心に内容が編集されている。副題にあるように世界でいま何が起こっているのか、世界はいまどんな問題を抱えているのか、それをスクリーンを一つのフィールドとして考えて行こうという試みの映画紹介である。
　民族学博物館では定期的に映画会を催している。世界各地の民族の現在の歩みを知ることが出来る珍しい映画などで極めて魅力的な企画が多い。

友の会企画研修旅行

鎌倉 New Wave を訪ねて

小澤拓美

一昨年5月9日・昨年5月28日に予定していながら、コロナ蔓延のため延期につぐ延期をした鎌倉ツアーをようやく開催することが出来ました。

2022（令和4）年5月18日。前日まで梅雨入りのような天候が続いていたが、当日は奇跡的に晴れました。暑くも寒くもなく見学には最高の一日。コロナ禍の続いているなかにあって、17名の参加があり、案内者としては感謝感激です。

鎌倉新仏教と鎌倉アカデミアの地

初めに向かったのは天照山。しかし、太平洋戦後の新制中学建設で大きく削られました。その横の光明寺開山・良忠と開基・執権経時の墓に詣で、鎌倉一の素晴らしい展望台で海を眺めたあと、工事中の本堂脇を下ります。引っ越しした地蔵堂を過ぎ、仮本堂である開山堂で阿弥陀如来や、善導、弁財天（弁天）、記主大師等を拝する。

開山堂前でスイッチを切り替え、太平洋戦争直後の「鎌倉アカデミア」の碑を確かめる。戦後社会を創造していった多くの文化人の揺籃の時代を考える。「幾何学を学ばざるものこの門に入るべからず」の掛札のあった場所も確かめる。「学生歌」も聞いていただきました。

鎌倉における最大級の江戸期建築たる山門前で記念撮影。

鎌倉アカデミア記念碑　　光明寺山門前にて

交易の港を開く・和賀江島

まっすぐ歩けば、すぐ海岸へ。道路下のトンネルで、何故本日に来ることに意味があるのか？に対する答えを発表しました。事前に多くの回答を得たが、正解は残念ながらゼロでした。答えは目の前に広がる和賀江島が最もよく見える日、つまり「夏の大潮」でした。太陽と月と地球が直線に並び、引力によって、潮の満ち干が最も大きい大潮は、冬と夏に一回ずつ起きる。ただし、冬の引き潮はここでは真夜中なので、和賀江島の見学に最もふさわしいのは年にワンチャンス。

地球の直径を20㎝とすれば、6mほど先の月の直径は6㎝、そして太陽は24k以上先（稲村ケ崎あたり）にある高さ21.8m位のビルに相当・・・という模型を使った説明は好評だったかも。ついでに、潮の満ち干こそ、海を豊かにさせ我らホモサピエンスの時代をもたらしたという話もうなずいていただけたかも。そして、鎌倉に木材や磁器を運び、13世紀以降の実質的首都としての機能を支えた和賀江島の歴史的役割を考えていただきました。

港湾施設を保護した幕府･そこに仕える役人(武士と言われるがいつも戦っているわけではなく、普段は行政職というべきか)･それを支える商人や職人たち・それら町衆たちの精神的な支柱になった各宗派の僧侶や尼僧たち、これらすべての鎌倉における社会は建物・道具・衣服・食べ物・食器等がなくては成り立たないわけです。

逗子市小坪との市境を歩いて、飯島公園に向かう。潮が引くに引いて、まだ New Wave の来ない和賀江島の大石のあいだに何人もの子供たちが生き物を探している。波は静かにして穏やかな日差しのもと、参加の皆様とお弁当を広げました。

㊤夏の大潮で現れた和賀江島
㊦和賀江島弁天（光明寺）

食事後に集まって頂き、まずは光明寺で先程お会いしたハッピー娘「江之島弁天」あるいは「和賀江島弁天」の「元のすみか」について小生の見解を少々ご披露しました。

日蓮開宗の遺跡・安国論寺へ

午後の見学に出発してすぐ、時代はあとの後北条氏時代の住吉城址を眺める。三浦道寸の滅亡への道であり、案内者としては道寸の達筆と三浦城陥落の悲劇が頭をよぎる。山麓にあるアジサイの美しい正覚寺の麓を通過、光明寺門前に戻る。トイレ休憩後、バスで、若宮へ移動。

現在の「鶴岡八幡宮」の地はもと「小林郷北山」といい、ここに「鶴岡若宮」を移転とは知っても、そもそもなぜ「鶴岡」なのか？ということも考えてみました。そのすぐ横の、新婚ほやほや芥川龍之介が使ったであろう井戸や、かつて泥棒を心配した「辻の薬師堂」など見て、「逆さ川」で皆さんに地形を考えていただきました。

元鶴岡八幡宮

日蓮開宗地と言われる３寺院の一つ「安国論寺」に到着。戦後の火災で焼けて再建されましたが、案内者としては３寺院のなかで最も好きな寺です。どこが本家かは意味がない、開宗当時の日蓮の有りようこそが大切、と説明させていただきました。私たち以外、誰もいない境内で、鎌倉時代の新しい風に想いをよせました。

商業で栄えた大町と小町

北条政子の墓（の一つ）がある安養院を過ぎ、大町四つ角が見えてきました。このあたりは町としての鎌倉の中心にあたり、穀屋などの商店が並んでいたようです。北に向かって曲がるとすぐ、旧「祇園」（現・八雲神社）や、桟敷の尼が「ぼたもち」を頼朝に、さらに刑場にひかれる日蓮に差し上げたという伝説の地（現・常栄寺）を訪れました。この２つの社寺は、鎌倉における商業の香りを残してくれている貴重な存在だと思います。

この一帯を原点のひとつとして、日本社会は「土地の時代」から「カネの時代」へと、行きつ・戻りつも移行していったのでした。それは世界的な潮流であったわけですが、そのことが是か非かは一概には結論の出せないことだと思います。

そこから、ほんのひと歩きで妙本寺に着きました。比企氏の悲劇についてはまた後日、ということで、妙本寺参道入口で本日のテーマについて、まとめをしました。案内者として、なかなか苦労して作成した、鎌倉（切通内側）の寺院分布図と商業地区とを重ねつつ見ていただきました。

幕府の政策は、貨幣経済の勃興を目の前にして、「銭は禁止だ！」「いや認めてもいい！」と右往左往している。その混乱の姿を北条権力が編纂した「吾妻鏡」全冊から拾いだし（なかなか厳しい作業でした）、資料のなかで皆様に提供いたしました。

新興勢力である商人たちの心の支えになったのは、特に日蓮宗と時宗。いずれも分かりやすい信仰で、現世の救済を保証してくれたことでしょう。しかし、鎌倉では少数派である浄土宗の光明寺も、律宗の極楽寺も和賀江島の経営に大きくかかわり、人々の現世における救済を支えんとしています。それぞれの宗派の主張の違いはあっても、浄土系・禅宗系・日蓮系の鎌倉仏教には、大局的な共通性を見るべきか、と思案いたします。

さらに、政治史・技術史・宗教史などをバラバラに見ていても、世の中はよくわからない。今回のコースは、それらも総合的に見ることが出来るのではないか、という観点で案内冊子を作製しました。

今回のツアーは、あれこれ盛りだくさんで、大変お疲れだったことでしょう。誠に申し訳ありませんでしたが、皆様よくぞついてきてくれました。諸般の事情あって友の会の役員が少ない中、参加者皆様の協力によって無事終了できました。ご参加のすべての皆様に感謝申しあげます。

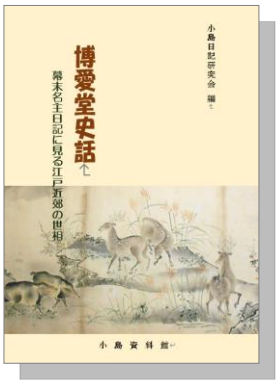
常栄寺（ぼたもち寺）にて

会員の著書紹介

小島日記研究会編

博愛堂史話

――幕末名主日記に見る江戸近郊の世相――



重政文三郎

私は、町田市小野路の旧家である小島家の古文書に触れる機会をいただいてすでに５０年に及ぶが、その間もっとも継続的にかかわってきたことは、小島家の代々当主が、小野路村の名主として書き継いできた江戸時代の名主日記の解読作業であった。そのために小島日記研究会を立ち上げて参加してきた。

研究会では解読した日記を出版して、幕末史研究に役立てようとしてきたが、他方で、解読した日記を読み解きながら、会員各自が興味・関心を持った事がらについて、個別・単発的な〝ひとくち話〟として１回600字のコラム記事を作成し、町田の地域紙『町田ジャーナル』に月１回のペースで掲載していただいている。

いまだ継続中ではあるが、すでに130回を数えるに至って、ひとまずまとめてみようということになって、コロナ禍の自宅時間の中で、これまでの全原稿を読み直して編集する機会を得て、やっと出版することが出来た。

小島日記は天保７年（1836）から始まって大正期まで86年間続いているが、そのうち特に幕末の日記の解読に注力している。私たちは、この村で名主を務める小島家の視点から書かれた毎日の記録を、当時の人びとの生活感を味わいながら、小野路村の風土と風俗を眺めている。村で起こる出来事は日々詳しく記録されているので、江戸近郊のこの村に押し寄せる幕末の緊張感を感じ取ることはまた格別である。開国と異国人の登場、天変地異、流行する疫病、さらには激動する政治情勢は、毎日の日記に反映されてやまない。幕末多摩から出て京で活躍する新選組のメンバーからの情報も多い。

私たちがその時々の関心で書き溜めたコラム記事で、本来別個の原稿であるが、次のような項目を立てて並べ替えてみた。目次の一部を紹介する。

○村の風景
小野神社の鐘／キリシタンの踏み絵／葬式に赤飯か／関東の呼ばわり山／勝五郎生まれ変わり物語／土産物いろいろ
○小島家の人びと
小島家の書斎／政敏の旅「なにわ日記」／歌集『類題新竹集』／角左衛門の狂歌／小島守政の漢学／小島渓南の漢学
○人物点描
小野路村俳人・北島良志／小島家の分家助左衛門／潰れ百姓民次郎／髪結い浅次郎／石阪昌孝／旗本山口直信のこと
○激動の幕末
小野路村から見た安政の大獄／生麦事件の犯人／村の感染症／村の事件／歩兵になった清十郎／長州戦争での戦死
○新選組こぼれ話
とろめし競争再考／土方歳三の俳諧／土方の遺言／近藤勇の祝金／佐藤彦五郎からの手紙／近藤処刑後の動向、など

コラムという枠組みの中で書いたエッセイ集であるが、執筆にあたっては、幕末日本の農村に生きる人々の日々の体験の中から、日本史のみならず世界史をも垣間見ようとしているわけである。

小島資料館刊　2,600円

これからの友の会

「友の会」は、解散後も現世話人会メンバーを中心として年に一・二回の情報交換会や史跡見学会あるいは研修旅行を通じて親睦を図る純粋な都歴研退職者の親睦団体となる予定です。その連絡方法はメールまたは紙ベースに頼ることとしたいと考えております。従って、情報交換会あるいは小旅行の案内を希望される方はその旨お申し出いただき、その際メールアドレスをお持ちの方はぜひお知らせください。

連絡先　soryumasuda1415@jcom.zaq.ne.jp（増田克彦）

「友の会だより」総目次

第*1*号（2007 平成 19）～*16*号（2022 令和 4）

1号（2007）
都歴研友の会の発足　増田克彦
総会報告　村木逸子
友の会会則
皆さんから寄せられた声
〈歴史随想〉　大田南畝と多摩　重政文三郎

2号（2008）
総会報告　鍵山充尚
関歴研神奈川大会報告　小澤拓美
〈歴史随想〉　幻の真慈悲寺を追う　増田克彦
大島遊覧の記　礒山　進
イタリアの歴史を楽しく学ぶ本　村木逸子

3号（2009）
友の会研修旅行「イタリア旅行記」　豊田岩男
史跡見学「世田谷線沿線の史跡」　加藤直道
〈歴史随想〉幻の真慈悲寺を追う(2)　増田克彦
総会報告
講演会「世界史の中の日本の森」　斎藤修氏
会員の著書　奥保善『冷戦時代世界史』

4号（2010）
友の会研修旅行「白石・米沢の旅」　黒田比佐雄
全歴研見学「東京で世界史を歩く」　村木逸子
平城(なら)へ行ってきました　重政文三郎
全歴研見学「サハリンの史跡見学」　加藤直道
台北故宮博物院訪問記　豊田岩男
会員の著書　千田捷熙『夢魂の人・高野長英私論』
『伊豆諸島を知る事典』の出版　樋口秀司
光輝く南イタリアシチリアの旅へ　村木逸子

5号（2011）
友の会研修旅行「南イタリア旅行記」矢島恒之
「鎌倉藤沢の寺宝を訪ねて」　松尾美栄子
全歴研見学「山東省史跡めぐり」　村上雅盈
友の会総会報告　村木逸子
都歴研講演会「江戸から東京へ」　佐伯眞人氏
お誘い＜平泉と奥六郡の旅＞　小澤拓美

6号（2012）
友の会研修旅行「平泉と奥六郡の旅」鍵山充尚
奥州藤原氏・見方の違う歴史　重政文三郎
多摩新選組のふるさとをたどる　吉田寛治
全歴研宮崎大会報告　豊田岩男
「牛込林一族墓から四谷お岩稲荷」　加藤直道
中国江南の旅　豊田岩男
講演「古代中世の芸能女性の変遷」　服部早苗氏
会員の著書　増田克彦『新田義貞鎌倉攻めの道を辿る』

7号（2013）
友の会研修旅行「中欧の旅」　村木逸子
「ハンガリーからオーストリアへ」　矢島恒之
全歴研東京大会報告　村木逸子
講演「アメリカ合衆国の歴史教育」　油井大三郎氏
「アジア・太平洋戦争の開戦」　吉田裕氏
都定通研の思い出　多田統一
川越研修の記　小澤拓美
友の会研修旅行「日光」ご案内
会員の著書　斎藤源三郎『帰国生と共に拓いた教育のグローバル化』／宮崎正勝『世界史の読み方』

8号（2014）
友の会研修旅行「日光～修験の道」　小澤拓美
「日光を見ずして結構と言う勿れ」　豊田岩男
史跡見学「埼玉県中部の史跡を巡る」　村木逸子
「武蔵の豪族のご先祖は」　菊池征子
全歴研報告「転換期の歴史教育とは」　池口康夫
博学連携フォーラムに参加して　小澤拓美
講演「比較史の復活へ」　小田中直樹氏
「中央アジアから見た世界史」　小松久男氏
会員の著書　むうさん（村上雅盈)『うたるればさすり血出ればぬぐい』／宮崎正勝『北からの世界史』／多田統一『インタビューする心』
会津若松への旅　中村道雄
“幻の大島憲法”を発掘　樋口秀司
総会報告／新企画「歴史教育研究助成制度」の創設／スペインの旅ご案内

9号（2015）
友の会研修旅行　「歴史のミルフィーユ」矢島恒之
「夢のような一週間」豊田岩男
全歴研大阪大会報告　小澤拓美
史跡見学「茨城にみる日本のすがた」　高田岩男
関歴研東京大会報告　村木逸子
都歴研講演「鉄道の創業」　老川慶喜氏
「ヨーロッパの中世」　千葉敏之氏
ウズベキスタン紀行　増田克彦

モザイクの町ラヴェンナへ　村木逸子
被災地訪問の旅　豊田岩男
会員の著書『日本の研究博物館・資料館』多田統一／『梧山堂雑書』重政文三郎
ご案内　台密と東密の歴史　案内人小澤拓美
「友の会歴史教育研究助成制度」のご案内

１０号（2016）
友の会研修旅行「台密と東密の歴史」　村木逸子
友の会『歴史教育研究助成制度』助成者一覧
関歴研埼玉大会講演報告／都歴研秋季講演会報告／都歴研春季講演会報告／都歴研春季史跡見学会
紀行「幸福の国」ブータン　増田克彦
伊豆大島見学～樋口秀司氏を偲ぶ～　木村清治
史跡見学案内「源頼朝時代の鎌倉を求めて」

１１号（2017）
友の会研修旅行「源頼朝時代の鎌倉」　松家直子
鎌倉史に親しむ　小澤拓美
幕末の旅日記　重政文三郎
史跡見学《多摩の自由民権》　村木逸子
全歴研大会報告　多田統一
講演「冷戦時代からグローバル化世界へ」　久保文明氏
紀行「満州開拓平和記念館」　村木逸子
イラン・イスラム共和国の印象　増田克彦
柳川探訪記　黒田比佐雄
今よみがえる真慈悲寺　増田克彦
友の会総会／会員の著書／友の会助成金／会員の訃報

１２号（2018）
見学会「さきたま」古代から近代を巡る　村木逸子
近世文書講読会を開催（感想）　鮒澤瑛子
ミニ歴史散策「王子駅周辺」　多田統一
友の会から歴史教育研究助成金を贈呈
史跡見学「東京グローバル散歩聖地巡礼」村木逸子
都歴研秋季講演会　「日本中世史」　高橋典幸氏
／「中国近現代史」吉澤誠一郎氏
東京産業考古学会文献調査メモ　多田統一
会員著書紹介『国分寺跡を巡る』　増田克彦
滝山城址探訪　小澤拓美
辺野古・高江のたたかい　松家直子
『なにわ日記』奈良と京の旅　重政文三郎
友の会総会報告／今年度の企画ご案内

１３号（2019）
史跡見学会「佐原・香取への旅」　黒田比佐雄
「佐原夢物語」　小澤拓美
学習会「国分寺跡を巡る」　増田克彦
歴史散策「たばこと塩の博物館」　多田統一
史跡見学「山梨県の国宝と甲斐源氏」　佐藤　徹
史跡見学「武蔵国誕生の歴史を歩く」　松家直子
講演「世界史探究をどう教えるか」　ダッタ・シャミ氏
紀行「高句麗遺跡と後金史跡を巡る」　増田克彦
史料紹介「安奉線の歴史」　滝沢　順
国際交流の中国旅行　豊田岩男
千住宿　まち歩き　矢島恒之
村から出征した「兵賦」と長州戦争　重政文三郎
会員著書紹介／会員訃報／総会報告／議案「友の会の今後」

１４号（2020）
史跡見学会「富士の恵みを訪ねて」　小澤拓美
ミニ歴史散策「森鷗外記念館他」　多田統一
２０１９年度歴史教育研究助成金を贈呈
全歴研大会分科会報告　多田統一
会員著書　高原將『私の「日本１００名城」巡り』
コロナ禍のなかの友の会活動について

１５号（2021）
コロナ禍のなかで――**近況はがき一言集**
日下部公昭／多田統一／矢島恒之／小澤拓美／安蔵玄洋／増田克彦／藤澤美惠子／豊田岩男／マコ・カン／重政文三郎／ムラキ／小宮進／髙原將／
古い地図で旅する　滝沢　順
エトルリア人を追いかけて　村木逸子
普陀山・天台山紀行　小澤拓美
チベット仏教の寺院･聖地を訪ねて　増田克彦
幕末の村、感染症とのたたかい　重政文三郎
会員の著書　高原將『私の海外旅行』／宮崎正勝『商業から読み解く「新」世界史―古代商人からＧＡＦＡまで―』

１６号（2022）
解散にあたって　友の会世話人会
私にとっての都歴研友の会　多田統一
思い出すことなど　増田克彦
私の世界史プリント作成法　松家直子
「竹橋事件」を知っていますか　矢島恒之
やじ馬四代―我が家系と近代史　小澤拓美
私にとっての缶詰　多田統一
映画から見る近・現代の歴史　村木逸子
友の会企画「鎌倉 New Wave を訪ねて」小澤拓美
会員の著書　『博愛堂史話』　重政文三郎
「都歴研友の会」会員一覧
「友の会だより」総目次

都歴研友の会　ホームページ

http://rekishitomonokai.sakura.ne.jp
都歴研友の会のホームページは、当分の間維持します。創刊号からの「友の会だより」はご覧頂けます。